

日本海海域における水中文化遺産調査概報： 平成21年度

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23769

「日本海海域における水中文化遺産調査概報 ー平成 21 年度ー」

佐々木 達夫・小川 光彦・酒井 中・垣内光次郎・九千房百合・
塩澤 隆慈・田崎 稔也・松井 広信・渡邊 玲・ナンチーチャーカイ・坂本 圭佑

はじめに

日本海は古来より大陸との交流の窓口として、あるいは列島内における物流の大動脈としての役割を果たしてきた。近世には北海道の物産や奥州の米が北前船で関門海峡を通り、瀬戸内海から大阪湾に入るなど、日本海を経由する物資の量は膨大なものとなった。

本研究は日本海海域の海底に沈む遺跡を、海岸を踏査して砂浜に落ちている陶磁器などを採集し、併せて博物館や個人が所蔵する海揚がり遺物を調査することにより、海底の状態を推測して潜水調査を実施し、沈没船関連遺跡を発見し、調査研究およびその保存と活用を行なうことにある。

本稿は金沢大学考古学研究室が日本海域水中考古学会とともに実施した日本海域の踏査および資料調査の平成 21 年度研究成果概要を報告するものである。

1. 能登半島沿岸部踏査（石川県）

1-1. 地形概略

石川県は本州中央の日本海側に位置し、北部は能登半島となって平坦な海岸線が続く日本海に突出している。能登半島の外浦側では各所に海岸段丘が発達し、波浪浸食が著しいのに対し、内浦側は沈降性の入り組んだ海岸線が続く対照的な海岸地形がみられる。能登半島沿岸は、古来より日本海海上交通の要衝であり、近世には北前船などの遭難記録も数多く残されている。

1-2. 海岸踏査（図 1-1）

2009 年度は珠洲市・輪島市・志賀町の 29 カ所において海岸踏査を実施した。踏査地点の座標決定にあたっては、踏査範囲を覆う方形の区画を設定し、その対角線の交点ないしは交点から最寄の海岸線の座標を踏査地点の中心として算出している。各地点ごとの景観については写真 1-7 を参照されたい。

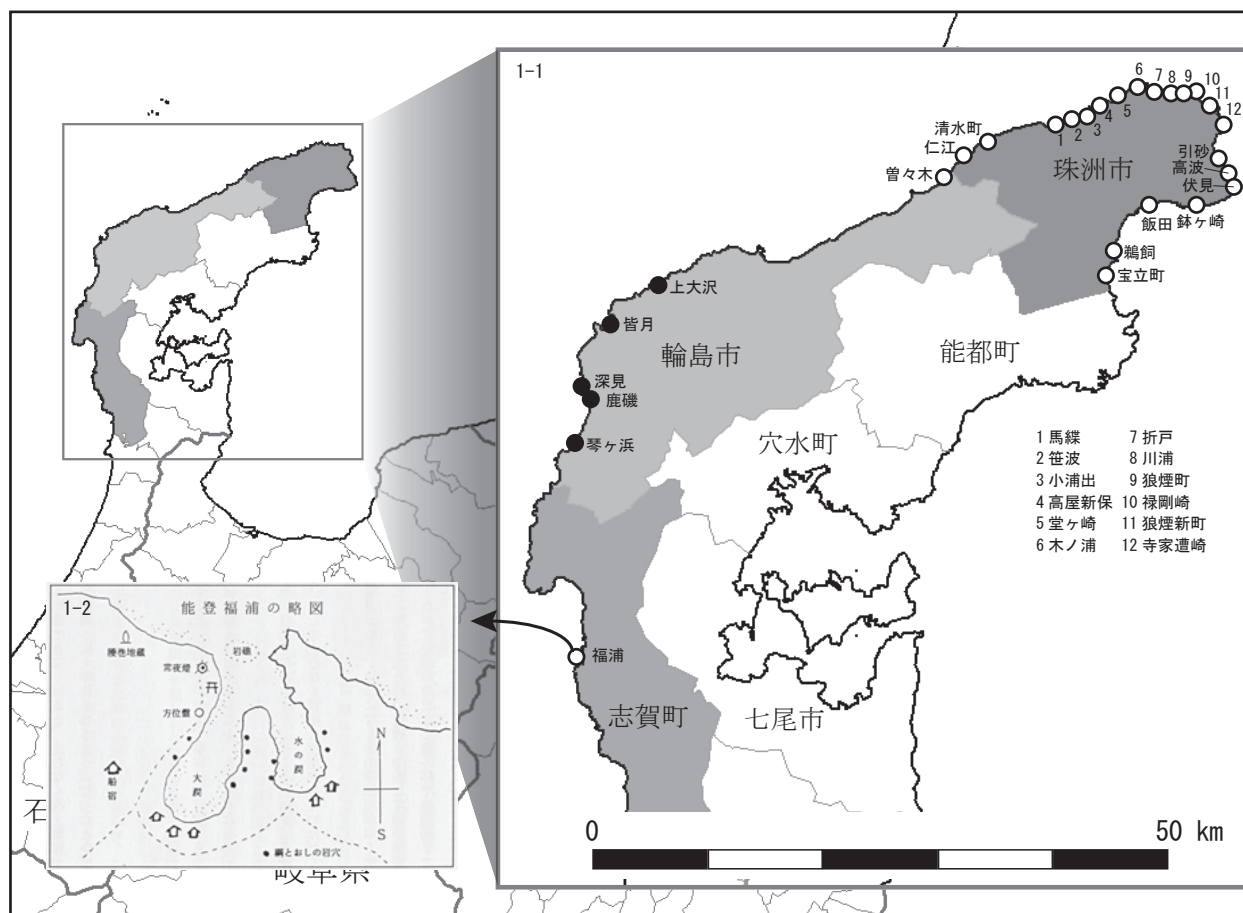


図 1-1 能登半島踏査地点分布図、
図 1-2 福浦港略図（上杉 1993 : 20 より転載）

福浦 (図 1-2 ~ 4)

志賀町福浦 (N37°5'36"/ E136°43'32") に位置する福浦港は、日本海側有数の風待ちの港として栄え、古くは渤海使が船出した国際港として、江戸時代には北前船の寄港地として機能した。港は「水の潤」・「大潤」の 2 つの入江からなり、港内各所に岩盤を穿って造られた「めぐり」と呼ばれる係留施設が点在する (写真 3-8)。

大潤西側に位置する「日和山」には、慶長 3 年 (1608) に日野資信によって日本最古の木造灯台が設置された。灯台に隣接する金毘羅神社前には弘化 4 年 (1847) に船頭佶平により寄進された方角石を見ることができる。

木造灯台から海岸伝いに南下した「田の尻」では、近世から明治にかけての陶磁器が採取された (図 3, 4)。

遺物 1 は内面に二重格子文が描かれる波佐見染付皿。18 世紀前～中葉。2 は波佐見斜格子文染付小丸碗。18～19 世紀。5～14 は明治の型紙染付皿であり、7～9・11 は蛇の目凹高台が施される。

「田の尻」の後背崖沿いに「極楽坂」まで移動すると、海を一望できる場所に近世の墓地がある。墓碑銘から被葬者の出自を北部九州や大阪など日本各地に求めることができる。

輪島市

輪島市では 8 月に曾々木海岸を、11 月および 12 月に門前町域の海岸をそれぞれ踏査した。門前町域では天候に恵まれなかったことも影響して、これまでのところ成果は上がっていない。調査を実行するタイミングを考慮することが重要であろう。

曾々木

輪島市町野町曾々木大川浜 (N37°27'14"/E137°4'14") に所在する砂浜。海岸の東寄りのところに通称「窓岩」と呼ばれる奇岩があり、そこから東側では小石が主体の浜となる。海岸の中央部は町野川の河口に面している。採集された遺物はごく僅かである。

珠洲市域

珠洲市の北部海岸には急峻な崖に囲まれた小さな入江が点在している。いくつかの例外を除けば、採集品は 19 世紀以降の陶磁器に限られる。現在の集落と近接している地点も多く、集落と廃棄あるいは河川から流出した物を含んでいる可能性も否定できない。

江戸時代から明治にかけて船が沈没した記録の残る姫島以南では採取された陶磁器の数量が急増する。

引砂・高波では大量の珠洲焼片とともに少量の近世陶磁器が散乱している。同地では定期的に表面採集を実施しているが、以前に表面採集を実施した地点でも、訪れるたびに新たな陶磁器片が散乱している。海岸では内陸から土砂とともに流出した痕跡は確認できず、遺物の中にはカルシウムが海底で再結晶化したものが付着している資料もある。これらのことから遺物は海から漂着したものを含んでいると考えられる。

高波海岸と伏見川河口を挟んで南に位置する伏見海岸でも珠洲焼および近世から明治にかけての陶磁器が採取されるが、それらの中には同じ種類の肥前陶磁器が複数個体含まれており、海上で投棄された船の積み荷であった可能性も考えられる。

鉢ヶ崎海岸から飯田海岸にかけては遺物が今次調査によって採取された遺物は少ない。飯田海岸では平安時代の製塩土器なども採取されたが、大部分は明治から大正のものである。以下に踏査地点毎の概要を記載する。

木ノ浦 (図 1-5)

珠洲市木ノ浦 (N37°31'45"/ E137°15'54") の入江に立地する礫浜である。8 月・9 月に実施した踏査の際には海岸に打ち上げられた漂着物は少なかったが、幕末～近代の陶磁器が比較的多く採集された。

折戸町

珠洲市折戸町 (N37°31'39"/ E137°16'50") に位置する砂浜。海岸の東端は折戸川河口に面している。入江の両脇にある岬の沖合いには「シャク崎」・「洲崎」と呼ばれる岩礁がある。踏査時には海藻や浮等の漂着物が比較的多く打ち上げられていた。珠洲市在住の枡谷氏が珠洲焼 2 片を採集した事例が知られるが、我々が踏査した際には近代の陶磁器が採集されるにとどまった。聞き取り調査を行なったところ、以前は沖合漁で珠洲焼が揚がったこと (具体的な場所は不明)、沖合いで千石船が沈んだことがあるという伝承を伺うことができた。

川浦町 (写真 1-5)

折戸町海岸の東、珠洲市川浦町 (N37°31'34"/ E137°17'57") に位置する砂浜である。踏査時は海藻などの漂着物が多く見られ、近世～近代の陶磁器が採集された。遺物が比較的多く採集された西側では小石が地表面に露出し明治時代などの染付片が混じる。東側は砂が地表面を覆っている部分が多く、陶磁器片は少ない。

砂浜一面に漂着した海藻が散乱している。

高屋町新保 (図 1-13-85, 87)

珠洲市高屋町新保 (N37°31'10"/ E137°14'40") に位置し、高屋漁港に隣接する砂浜。海岸には 2 つの小河川が流れ込み、海岸線から数メートルの所に消波ブロックが設置されている。近代を中心に珠洲焼や近世磁器を含む陶磁器片が採集された。採取された遺物は磨耗があまり見られず、消波ブロックが敷設されているため海底から遺物が打ち上げられ難いと考えられることから、採集遺物のほとんどは付近に立地する集落から投棄されたものと考えられる。

遺物 85 は有田染付皿で 1640 ~ 50 年代の製品。高台は小さく、畳付が直線的に切れ、釉際の処理も施されていない。畳付部分の釉がはじいて、きれいに掛かっていないことから、素焼きを行わない生掛けと考えられる。87 は 18 世紀後半の筒型碗底部。

笹波町 (図 1-13-88)

馬縹町鰐崎から笹波町までの海岸 (N37°30'52"/ E137°13'18") で砂浜と岩礁が混在する。近世~現代の遺物が採集された。遺物 88 は近代の色絵蓋で外面中央に「山屋」の文字、体部外面に五弁花が上絵付けされている。

馬縹町 (写真 1-6)

珠洲市馬縹町に位置する、鰐崎から大崎にかけての浅い入江状になった砂浜海岸 (N37°30'29"/ E137°12'55")。海岸には 4 本の小河川が流れ込む。漂着ゴミや海藻類も比較的少なく幕末から近代の陶磁器片が少量採取された。

寺家遭崎 (図 1-6)

珠洲市三崎町寺家字遭崎は寺家漁港に隣接し、小石と砂からなる礫浜 (N37°30'12"/ E137°21'3")。沖合いに姫島が見える。江戸時代後期の染付、近現代の陶磁器や蛸壺が採集された。

遺物 19 は 18 世紀後半の青磁染付筒型碗、22 は明治の型紙刷染付、24 は 19 世紀の肥前の染付皿で蛇の目凹高台を有する。27 は墨呉須で染付された大正以降の製品。29 は日本硬質陶器株式会社製のクロム染付。

引砂 (図 1-7, 8)

珠洲市三崎町森腰から引砂にかけての砂浜 (N37°28'11"/ E137°21'4")。須恵器・珠洲焼・近世・近代の遺物が採集される。北側の森腰から同地にかけて須恵器と珠洲焼の破片が採集されているが、特に珠洲焼が多い。

同海岸には宇治役場裏遺跡、森腰浜遺跡が立地することから、海岸線の改修工事等により流出した砂に混じていた遺物が海岸線に再び打上げられている可能性もあるが、他の地点と比べて一際多くの遺物が採集され、両遺跡は古墳時代の遺跡であることから、海底に遺物の集積が存在することも考慮される。

図 1-7 は同海岸北半で採取された近世から近代の遺物である。遺物 30 は 18 世紀後半の波佐見丸文丸碗、31 は同時期の広東碗である。図 1-8 は同海岸南半で採取された中世から近代の遺物である。37 ~ 41 は珠洲焼、42 ~ 44 は近世・近代の陶磁器である。37 は壺口縁で珠洲焼編年の III ~ IV 期の製品。38 は鉢口縁部で時期は III 期。39 は外面に波状文が描かれた鉢で I 期の製品。40 はシュノーケリング調査時に採取された壺の底部、41 は壺口縁で製作時期はいずれも III ~ IV 期である。43 は 18 世紀後半の肥前の筒型碗。

高波 (図 1-13-86)

珠洲市三崎町高波 (N37°27'44"/ E137°21'23")。珠洲焼および近世~現代の陶磁器が採集された。海岸の背後の丘陵裾部の畑地は高波遺跡として知られており、海岸で採取された珠洲焼もこの遺跡から流出した可能性を考慮せねばなるまい。また、同地は正徳四年 (1714) に越前からの船が難船した記録が残っている (『珠洲市史』第 3 巻 P. 527-9)。遺物 86 は 18 世紀末 ~ 19 世紀の肥前で焼かれた製品で見込み部分に蛇の目釉剥ぎが施される。

伏見 (図 1-9 ~ 11)

珠洲市三崎町伏見にある、紀の川河口南側に位置する礫浜 (N37°27'28"/ E137°21'32") である。中世~近代の陶磁器が数多く採集された。

遺物 45 は珠洲焼の中甕の口縁で海水中のカルシウムが再結晶化して付着している。46 は珠洲焼播鉢。口唇部に沈線文様が施される。時期はいずれも V 期。

47 は肥前の染付唐草文皿と思われるが、磨耗が激しく製作年代不詳。48 は波佐見青磁碗、49 も同じく波佐見の染付碗で時期はともに 17 世紀中葉。50 は口唇部に口鏝が施された 18 世紀の染付皿。51・52 は波佐見の皿。18 世紀前半。53 は見込部分に蛇の目釉はぎが施されアルミナが塗られている。19 世紀前半の波佐見染付丸文丸碗。54 は肥前染付皿で体部には型打ち成形による蓮蓮状の浅い窪みが認められ、蛇の目凹高台を有する。18 世紀。55・56 肥前徳染付利。18 世紀。57 は肥

前染付皿。59 は 18 世紀末～19 世紀初頭の波佐見の陶胎染付丸碗。60 は見込み部分が蛇の目釉はぎを施され、アルミナが塗布されている。19 世紀前半の波佐見。61～64 は 19 世紀の肥前染付皿ないし碗。65 は 18 世紀末～19 世紀の肥前の染付皿。66 は 19 世紀前半の肥前の鉢。67～73 は明治の染付。70 は型紙、71 は銅版刷、72 は銅版転写で絵付けされている。

鉢ヶ崎

珠洲市鉢ヶ崎 (N37°26'20"/ E137°19'43") に所在する東西幅約 3 km の砂浜である。珠洲焼資料館を基点に東西二手に分かれて蛸島漁港から小泊漁港の区間で表面採集を試みたが近現代の陶磁器が少量採取されたにとどまっている。

飯田町 (図 1-12、写真 1-1～7)

珠洲市飯田町 (N37°26'29"/ E137°16'57") に所在。若山川の河口から蛸島漁港までの東西約 3km の海岸である。現在の珠洲市の中心部に位置し、海岸に沿って住宅地が展開している。平安時代の製塩土器 (写真 1-7) も採取されたが、採集品の大部分は近代以降の陶磁器であり、このことは後述する個人資料の組成とも矛盾しない。

遺物 74 は青磁碗。時期は不明。75・76 は湯呑。82 は陶器鉢。産地は不明。78・80 は近代の印判染付。

鵜飼

珠洲市鵜飼にある見附島から般若川河口までの間に位置する海岸 (N37°24'15"/ E137°14'38") であり、海岸中央部に面した鵜飼川南側は鵜飼漁港が立地しており護岸されている。北側の海岸では漂着ゴミや海藻類は見られるものの遺物は発見できなかった。

宝立町

珠洲市宝立町 (N37°23'7"/ E137°14'13") 見附島から恋路ヶ浜までの南北約 3.3km の海岸である。大部分の箇所がすでに護岸された状態であり、海岸沿いに展開する集落より廃棄されたと思われる近現代の陶磁器がごく少量採取されるにとどまる。

1-3. 海揚がり品の調査 (図 1-14～17)

珠洲市在住の柘谷秀一氏は、長年にわたって飯田町海岸を中心とした市内各所の海岸で陶磁器片を採集している。ここでは、6 月に分類・整理を行なった珠洲市飯田町の和歌山川河口左岸の狭い範囲の砂浜で採取したものを紹介する。同地点では長年にわたって数多く

の陶磁器片が打ち上げられ採集されてきたが、砂浜前の海にテトラポットを敷設してからは海岸に陶磁器片は見られなくなったという。河口の砂浜に堆積していた陶磁器が砂浜が削られるときに地表面に現れたと推定される。現在でも年に一度、梅雨明けの時期に河口に堆積した土砂を浚渫するほどに若山川の土砂堆積は多い。こうしたことから、江戸時代初期から川や海岸に投棄された飯田町の生活用陶磁器が地表面に現れたと推測される。

採集品の時代や産地内訳では中世は珠洲焼片が多く、中国青磁などは見られない。江戸時代は 17 世紀中頃の波佐見染付と嬉野陶器銅緑釉皿が数点見られる。17 世紀後半から 19 世紀中頃までは、波佐見染付碗および皿が主であり、18 世紀代の製品が多い。有田染付も見られる。19 世紀代には志田や砥部の製品も含まれている。明治時代の印判染付は量が最も多い。明治大正のゴム印染付は印判染付に次いで多く、陶器は少ない。昭和のガラス玉 (ビー玉) なども 1 千個を超える量が採集されている。

柘谷氏が珠洲市三崎町引砂海岸で採集した資料は、大部分が珠洲焼の破片で、器種は壺・甕・播鉢である。

遺物 89 は 17 世紀中葉の波佐見青磁皿、90 は 17 世紀末の銅緑釉皿。内野山窯あるいは嬉野の製品か。

91 は 18 世紀前半の染付丸碗である。産地は波佐見か。92～96 は 18 世紀前葉～中葉の肥前磁器である。92～94 は波佐見。92 および 93 は見込部分に蛇の目釉はぎが施される。95・96 は有田の製品である。97 は波佐見で 18 世紀後半の丸文丸碗、98 は産地不明染付筒型碗。製作時期は 18 世紀後半と思われる。99・100 は 18 世紀の波佐見丸碗。101 は 18 世紀後半の波佐見染付皿。

102 は 18 世紀後半～19 世紀の波佐見系染付皿。底部は碁笥底状に削りだされ無釉であり、見込み部分に蛇の目釉はぎが施されるとともに中央に五弁花が描かれる。103～105 は 18 世紀後半～19 世紀前半の肥前系染付皿。106 は 18 世紀後半～19 世紀の波佐見系染付皿。107～109 は 18～19 世紀の有田染付。107・108 は丸碗で 108 の高台裏には崩れた二重角福が描かれる。110 は 18～19 世紀前半の波佐見染付小丸碗。

111 は波佐見染付端反碗。19 世紀前半の製品。112 は産地不明の白磁 / 染付碗で見込部分に蛇の目釉はぎ。18～19 世紀か。113 は 19 世紀の波佐見青磁仏花瓶、114 は肥前地域で焼かれた青磁香炉。115 は染付皿。蛇

の目凹高台を持ち、見込部分にハリ痕が確認できる。1 砥部の 19 世紀の製品。116・117 は 19 世紀の志田の製品。118 は 19 世紀の波佐見系染付皿、119 は同じく 19 世紀の肥前染付皿。120 は 19 世紀の染付皿だが、こちらは蛇の目凹高台ではない。121 は明治時代の波佐見で焼かれた染付碗である。

1-4. 小結

石川県に北陸本線が開通したのは明治 30 年 (1897) の福井 - 小松間がはじめである。北陸本線が米原から直江津まで全区間で開業するのは大正 2 年 (1913) である。その頃から能登半島における物流は北前船による海運中心の物流構造から鉄道中心のそれへと移り変わった。近世から幕末・明治にかけて肥前や砥部で焼かれた陶磁器が能登半島の先端で大量に発見される事実は、そのことを裏付けている。

引砂および高波では近世以降の陶磁器よりも珠洲焼の割合が上回る。遺物採集地点付近には古代・中世の遺跡が点在している。これらの遺跡や河川が海岸において採取される遺物の供給源となっている可能性も否定できないが、海岸で発見される以前に海底環境下にあったことを伺わせる遺物も含んでいる。

伏見では幕末から明治にかけての遺物が採集された。その中には同じ種類の陶磁器が複数固体含まれており、集落からの廃棄物というよりは船舶に積載されていた積荷の様相を反映しているようにも思われる。

飯田沖の海域では底引網漁によって珠洲焼が引き揚げられた事例が知られているが、鉢ヶ崎以南の飯田湾に面した砂浜では踏査時に採集された遺物の量はごく僅かである。海岸部における遺物散布地の遺物供給源を特定するためにも水中調査の必要性が高まる。

(文責 佐々木・酒井)

参考文献

- 石川県教育委員会 1992 『石川県遺跡地図』。
 上杉喜寿 1993 『能登・加賀・越前・若狭 北前船の人々』安田書店。
 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』
 珠洲市史編さん専門委員会編 1978 『珠洲市史』第三巻 資料編 近世古
 文書、珠洲市役所。
 田川捷一 編 1991 『福浦の歴史：客人の湊』福浦の歴史編集委員会。
 富来町史編纂専門委員会 1974 『富来町史』富来町。
 吉岡康暢 1994 『日本海海域の土器・陶磁』六興出版。

2. 能登半島珠洲市における潜水調査

2-1. はじめに

日本海に突出した能登半島の先端部に位置する石川県珠洲市の沿岸は、古来より日本海海上交通の要衝であり、その周辺海域では中世陶器の珠洲焼が数多く引揚げられており (表 2-1)、近世には北前船などの船舶が遭難に会ったとされる記録も多く見られる (珠洲市 1978)。また珠洲焼資料館には海揚げりの珠洲焼が複数保管されており (写真 2-1)、さらに市内在住の個人の方が表採された陶磁器を閲覧し、その遺物の位置付けを行うことも今後の周辺海域調査の方向性を考える上で有効な判断資料となる。これらの諸条件を鑑み、珠洲市沿岸海域は広大な日本海海域において水中文化遺産の調査を行うには好適の地であると判断された。

2-2. 事前調査

珠洲市において、2009 年 6 月 7 日～9 日と 9 月 5 日～6 日に 2 度の引揚げ品・海岸採集品の資料調査を行った。

①個人所蔵海岸表採陶磁器の資料調査 (写真 1-1～6)

飯田町飯田海岸表採品は近代磁器が大半を占め、三崎町高波・引砂では珠洲焼が半数以上を占めている。飯田海岸表採資料の中には、ビー玉・おはじき等の近現代遊具も多量に含まれ、これらも近代陶磁器と同様に海岸で採集されたものであるが、海岸線の浸食を防ぐための消波ブロックを沖側に設置以後は、陶磁器他の表採はほとんど出来ないという。この集中散布地点は河口付近に位置しており、近代～現代にかけて人為的投棄や河川の浸食・運搬作用によって河口に運ばれていたものが、波の打ち寄せ作用と洗浄を受けて表出した可能性が高いものと思われるが、海岸線付近の海底面の確認も必要であろう。

②海底引揚げの鉄錨

三崎町寺家沖の姫島礁近海から引揚げられた鉄錨 2 点の資料調査を行った (写真 2-2)。これらの四爪鉄錨は、(中世後期～) 近世～近代にかけてのものと考えられるが、鉄錨の年代に関しては不分明であり今後関連資料の収集に努めたい。ただし江戸時代の北前船は 200kg 超～400kg 近い重量の錨を使用したとされることから、本資料は両者とも比較的小型の四爪鉄錨に該当するものであり、より小型の船舶に使用されたものと思われる。

る。既に酸化腐食が進んでいることから、保存処理についても考慮する必要がある。

a. 四爪鉄錨① (写真 2-2 奥)

発見場所：珠洲市三崎町寺家沖「ゴスケグリ」海底、水深約 17～18 m。所有者：個人蔵。法量：現存長 130cm、フック先端部間隔 92cm、アーム部湾曲度 12：46、リング部現存長 9cm、現存幅 9cm、リング部厚 5cm、シャフト部厚 6×4cm～12×6cm、アーム部厚 0.5×4cm～7×4cm、重量 (36kg)。鍛造。貝殻多量付着。

b. 四爪鉄錨② (写真 2-2 手前)

発見場所：珠洲市三崎町寺家沖「ナカグリ」海底、水深約 8 m。所有者：個人蔵。法量：現存長 166cm、フック先端部間隔 90cm、アーム部湾曲度 14：45、リング部長 18cm、幅 11.3cm、リング部厚 2×3.5cm、シャフト部厚 3×4cm～6×9cm、アーム部厚 0.5×3.5cm～3×4cm、重量 (36kg)。鍛造。貝殻除去済。

四爪鉄錨①の所有者でもある漁師の方に、直接船にて鉄錨の引揚げ地点(「ゴスケグリ」、「ナカグリ」と) 姫島礁周辺海域を案内いただいた(写真 2-3・図 2-1)。姫島礁は寺家漁港沖、東北東約 1 km の海域より北東方向に延びる約 800 m の岩礁帯で、一部が常時海面に表出しているものの、水深 20 m 付近から急激に立ち上がり、地層の走向に沿って列状に延びた大小の瀬と暗岩・干出岩が連なり、海上航行を困難にさせている。瀬の大きなものは陸側より「姫島」、「中ノ島」、「沖ノ島」と呼称される。近世～近代において座礁・難船記録の多い地点であり、聞取りでは近代以降においても北西側から進入した船が座礁することが多かったようである。また、港と姫島の間位置する「行者礁」も事故の多い地点である。視察時には水面直下で暗岩が確認され、夜間は陸地に設置された行者礁照射塔より投光が行われているとのことである。これら鉄錨が引揚げられた 2 箇所と姫島礁周辺海域は、潜水調査の対象地として非常に有望な海域であると思われた。

2-3. 海岸踏査 (分布調査)

珠洲市蛸島町・飯田町・三崎町の 3 箇所の海岸踏査においては、須恵器(古墳・奈良・平安)、珠洲焼(中世)、肥前系磁器染付(近世)、磁器染付(幕末～近代)等、総計 150 余点の遺物を表採した。蛸島町鉢ヶ崎海岸では目立った遺物散布は無いものの、飯田町飯田海岸では近代磁器が大半を占め、三崎町高波～引砂～森腰で

は珠洲焼が半数以上を占めるという陶磁器の構成比は、個人所蔵の表採資料と同様である。

高波～引砂～森腰海岸では、須恵器と珠洲焼の破片が多く採集されているが、特に珠洲焼が多い。近隣海岸付近に古代の遺跡が存在することから、海岸線の改修工事等により流出した砂に混じていた遺物が再度、海岸線に打上げられている可能性が考えられるものの、相当量の遺物が採集されていることから、海底にも遺物の集積が存在することも考慮され、同所においても海底面の確認が必要であると思われた(海岸踏査の詳細については第 1 章を参照)。

2-4. シュノーケリング目視確認調査

2009 年 8 月 8 日～9 日に、珠洲市引砂～高波海岸においてシュノーケリングによる海底目視確認調査を行った(写真 2-4)。遺物が確認された場合は浮遊ブイを設置し、検出状況の写真撮影とハンディ GPS (日本測地系)による測位を行ったのち遺物を回収した。前日からの雨水流入と波により透視度は 0.5 m 以下で、特に水面付近の濁りが激しく、またウネリにより絶えず波に揉まれるという環境下であったものの、4 箇所の海底面において珠洲焼 3 点と、近世陶器 1 点を確認することが出来た。

回収遺物 (写真 2-5・6)

海底面で確認した遺物 4 点は全て回収した。

- ・No. 1：珠洲焼壺 or 甕胴部、沖合約 10 m (N37°27'0"/E137°21'0")、水深約 1 m、砂底。
- ・No. 2：珠洲焼鉢底部、汀線付近海底 (N37°27'0"/E137°21'0")、水深約 0.5 m、砂底。
- ・No. 3：肥前内野山窯銅緑釉陶器皿底部、沖合約 80 m (N37°27'0"/E137°21'0")、水深約 2 m、岩礁。
- ・No. 4：珠洲焼壺 or 甕胴部、沖合い約 100 m (N37°27'0"/E137°21'0")、水深約 2 m、岩礁。

悪条件下とは言え、海岸線で採集できる遺物の数量と比較して、海底での検出数が少なすぎるように思われた。海底面での遺物分布が少ないのは、遺物が海岸部の砂丘遺跡より流出したものである可能性も考えられる。今後は、さらに付近の目視確認を行うとともに、引砂～高波境で沖に延びる岩礁域縁部を潜水調査にて確認する必要があると考えられた。

2-5. 潜水確認調査

2009 年 9 月 11 日（金）～ 15 日（火）にかけて、珠洲市三崎町寺家沖、三崎町高波沖において、スキューバ潜水による海底目視確認調査を行った（潜水実働 3 日）（写真 2-7）。

①調査の方法

潜水調査は 2 名（以上）一組のバディ・システムによる円形サーチを基本とした。目標とする潜水調査地点に船上よりブイを投入し（潜水後、海底状況と遺物の有無により適時移動させ）、30 m のエスロン製メジャーテープを海底のウエイト部分に固定し、半径 30 m の範囲内で 0 度・45 度・90 度といった磁方位の方位角ごとに原点との間を往復し、海底面の目視確認を行った。

今回の潜水調査は遺物の有無の確認に主眼を置き、遺物が確認された場合は写真撮影のみを行い、ブイの設置地点をハンディ GPS（日本測地系）により測位した。また海況により調査船の使用が出来なかった 13 日の三崎町高波の潜水調査は、ビーチエントリーしたダイバーがブイを曳きながら海底を移動し、遺物が確認された場合は海底にブイを固定し、後日 GPS による測位を行った。

②潜水調査

a. 「ナカグリ」（図 2-1）

ナカグリは水深 6～7 m の海面下の根であり、水深 12 m の周辺部の砂地より岩礁が隆起している。四爪鉄錨②の引揚げ地点であり、最浅地点付近にブイを投下し（ブイ X）、ウネリによる海中の寄り戻しのある中、30 m メジャーテープの範囲内で四方を目視するが、本潜水において遺物等の確認は無かった。尚、ブイ投下地点の測位は行っていない。

b. 姫島礁「沖ノ島」北西側

姫島礁はその南西端に灯台が設置され、磁方位でおおよそ N70°E の方向に走向が延びている。

・ブイ A（12 日午前① N37°30'0"/E137°21'0"）：水深が急激に深くなる海底崖下にブイを投入し、沖ノ島を背に 30 m メジャーテープの範囲内で、半円形サーチを行った。崖下は水深約 15 m から北西側へ緩やかに傾斜し岩礁および巨礫が続き、ブイから北に約 25 m 付近、水深約 17 m の地点で、より傾斜の緩やかな砂地に移行する。ブイの西側では遺物は見られなかったが、北東側の崖下には鉄鋼船フレームの残骸があり（写真 2-8）、その北西側付近を中心に数点の近代磁器が散見された（写

真 2-9・10）。

・ブイ B（14 日午前① N37°30'0"/E137°21'0"）：ブイ A のさらに北東側にブイを投入し、半円形サーチを行う。南西側はブイ A にても確認した鉄鋼船の残骸があり、さらに北東側では新たな鉄鋼船の残骸が確認される。遺物は近代のもと思われる瓦片が散見された。

・ブイ C（14 日午前② N37°30'0"/E137°21'0"）：ブイ B の北東側にブイを投入し、半円形サーチを行う。近世～近代の陶磁器破片が散見された（写真 2-11・12・13）。

・ブイ D（14 日午後① N37°30'0"/E137°21'0"）：ブイ C の北東側にブイを投入し、半円形サーチを行うが遺物の確認は無かった。

・ブイ E（15 日午前① N37°30'0"/E137°21'0"）：ブイ D の北東側にブイを投入し、半円形サーチを行う。ブイの投入地点は沖ノ島の北東側に位置する「エイグリ」の南西端にあたり、潮流が無かったことから両礁間のチャンネルの途中まで進入する。陶磁器の確認は無く、機関砲の砲弾（長さ 20cm 弱）の散在が確認された（写真 2-14）。その後、透視度が良かったためメジャーの距離を越えて、エイグリ北西端付近までの岩礁範囲の目視を行うが遺物の確認は皆無であった。

c. 三崎町高波沖

13 日は海況により外浦側の漁港所属の調査用漁船が出港出来なかったものの、内浦側の高波付近は潜水可能な状況であったため、ビーチ・エントリーにて潜水調査を行うこととした。1 組目は海岸よりブイを持ってエントリーし、砂地と岩礁域の狭間を沖に進みながら目視確認を行った。肥前系磁器片 1 点、近代磁器片 1 点、珠洲焼片 1 点の他、近代以降の瓦片（写真 2-15）多数を確認し、ブイは沖側の最前部に置いて戻る。2 組目は前組の残したブイを目指して水面移動を行い、さらに沖側の目視確認を行った。近世～近代の磁器破片などが散見される（写真 2-16・17）他、珠洲焼胴部破片が 1 点確認された（写真 2-18）。目視調査後ブイは珠洲焼破片の検出地点に固定した（ブイ F）。

後日、設置しておいたブイ F（N37°27'0"/E137°21'0"）は波の影響を受けずに設置位置を保っており、海底面（水深 8.6m（9/14、16:20））検出の珠洲焼破片の撮影後、周辺部の目視確認を行い、陸側と沖側においてさらに新たな珠洲焼甕胴部破片 2 点を確認した（写真 2-19・20）。尚、ブイ F にて測位した珠洲焼に関しては、サンプル資料として回収を行った。

2-6. 潜水調査の成果と課題

姫島礁「沖ノ島」と「エイグリ」北西側海底の目視確認を行い、沖ノ島の海底崖下に複数の鉄鋼船を確認し、その周囲において若干の近代陶磁器片の散布が確認された。散在する陶磁器片は、近代以降のものと思われる鉄鋼船の積荷の一部であると考えるのが妥当であるが、一部の陶磁器は近世に比定されるものもあり遺物と船の関係を考えるためにも、より時間を掛けた詳細な潜水調査が必要である。沖ノ島の北西約 25 ～ 30 m 付近から沖側では砂底質となり、十分な目視調査は出来なかったものの、円筒形金属製品の突起物もあり砂地においても条件によっては遺物等が出出する可能性が考えられる。姫島礁の南東側も含めて周辺海域の機器による探査を行うことも有効な調査手段であると思われる。

高波沖では 8 月のシュノーケリング調査において、約 100 m 沖の海底で珠洲焼の破片が回収されている。陸地から移動した遺物と考えるには距離が離れているため、これが偶発的な発見遺物であるかどうかの判断のために潜水調査を行ったが、さらに海岸より離れた約 400 m 余沖の海底からも 3 点の珠洲焼破片が確認された。この距離においては陸地から自然現象により移動したとは考えにくく、付近の海面から廃棄されたものと想定すべきであろう。ただし、10cm 内外の大きさの破片であり、この数点の遺物を持って沈没船の存在を想定することは早計であり、高波沖においてもさらに詳細な潜水調査が必要であると思われる。

今回はナカグリ、姫島礁、高波沖の 3 箇所において潜水調査を行ったが、直接近代以前の沈没船を発見するには至らなかった。しかし、何れの地点も関連資料が確認されており、今後の調査成果に期待したいが、何よりも珠洲市民の方々特に漁業関係者の方々に学術目的の潜水であることの趣旨をご理解頂き、貴重な漁場において実際に潜水調査を行うことが出来たことは最たる成果である。

(文責 小川)

参考文献

- 珠洲市史編さん専門委員会編 1978『珠洲市史』第三巻 資料編 近世古文書、珠洲市役所。
室岡博 1972『頸城地方の海と海底海浜遺跡』上越市立総合博物館。
萩市史編纂委員会編 1987『萩市史』第 2 巻、萩市。

田中照久 1987「玄達瀬から発見された越前焼」『福井考古学会会誌』第 5 号。

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館。

垣内光次郎 1995「能登・大沢海岸出土のタイ壺」『大宰府陶磁器研究—森田勉氏追悼論文集—』森田勉氏 遺稿・追悼集刊行会。

文化庁文化財保護部記念物課 2000『遺跡保存方法の検討—水中遺跡—』文化庁。

大安尚寿 2005「珠洲窯の概要」『中世日本海域の土器・陶磁器流通—壺・播鉢を中心に—』石川県埋蔵文化財センター。

宮田進一 2005「日本海沿岸に沈んでいた近世陶磁器—肥前陶磁と越中瀬戸—」『海・潟・川をめぐる日本海文化』II、富山市日本海文化研究所。

山陰中央新報 (Web News) 2006. 7. 17「大田・沖泊で海底に眠る遺物を収集」。

※写真 2-4 は大安尚寿が、2-15・18 は山本祐司が、その他は小川光彦が撮影を行った。

3. 島根県石見銀山遺跡・温泉津沖泊における潜水調査 3-1. はじめに

2007 年 7 月に世界遺産として登録された石見銀山遺跡は、1526 年に発見され 1923 年に休山するまで、約 400 年間にわたって採掘された日本を代表する鉱山遺跡の一つであり、16 世紀半ば～17 世紀前半の全盛期には、世界の銀産出量の約 3 分の 1 を占めたとされる日本銀のかなりの部分が石見銀山で産出されたものであったと考えられている。その積出港として使用されたのが鞆ヶ浦 (16 世紀前半～中頃)、沖泊・温泉津 (16 世紀後半～近代) である (図 3-1)。

沖泊では世界遺産登録前年に、レジャーダイバーによって港内の海底より近世～近代にかけての陶磁器が引揚げられており、海底における遺物の存在は既に確認されている。また管轄の行政機関においても、石見銀山の外港を文化財として保護するとともに実態の解明も積極的に進める方向であり、島根県教育庁文化財課世界遺産室、大田市教育委員会教育部石見銀山課の協力を得て水中文化遺産の調査を行うこととなった。

3-2. 事前調査

2009 年 9 月 2 日～4 日にかけて、島根県大田市温泉津町温泉津湾・沖泊港と仁摩町にまたがる周辺海岸および石見銀山世界遺産センター、石見銀山遺跡の視察調査を行った。

沖泊港とその周辺海岸部は、地元出身で地理に詳し

い大田市教育委員会の今田善寿氏の案内を受け（写真 3-1）、仁摩町の鞆ヶ浦および石見銀山遺跡は県教育庁文化財課の椿真治・守岡正司氏の協力により車にて視察・見学を行った。また世界遺産センターでは沖泊港引揚げ陶磁器の資料調査を行い（写真 3-2）、県教育庁文化財課・大田市教育委員会の方々と視察調査の検討会を行った（写真 3-3）ほか、地元ダイビング関係者の浅田昌平氏から海域の状況などをお聞きした。

鞆ヶ浦と沖泊港は共にリアス式海岸に形成された天然の良港であり、湾奥部においては時化においても安全な停泊が可能なものと考えられる。波食台では石材を切出した痕跡が遺存し（写真 3-4）、汀線際の岩礁では所々に「鼻ぐり岩」と言われる船の係留に使用するための加工が施されるなど（写真 3-5・6）、石川県志賀町の福浦港との共通点も見られる（写真 3-7・8）。

沖泊港では世界遺産登録前の 2006 年 7 月に、石見銀山の歴史に興味を持つ地元と関西のダイバー 10 名によって、港内の水深 2～4 m の海底より陶磁器 9 点が引揚げられている。その際の遺物は石見焼の他、19 世紀の肥前系あるいは産地不明の近代染付が多くを占めるが、一部 18 世紀に遡る肥前染付も含まれる。また、大田市教委の今田氏によれば、温泉津湾外の「立鳥瀬」付近の海底では、多数の石材と思われる直方体の石の散乱が目撃されており、湾外においても遺物が確認できる可能性が高いものである。今回の視察調査においては、臼ヶ浦湾奥部の砂浜においても近世磁器が確認されている。

沖泊港内は周辺地域とともに史跡指定区域にあり、また温泉津湾も緩衝地帯として保護を受ける範囲に該当する。潜水調査の可否と遺物の扱いに関しては県文化財課・市教委とのコンセンサスが必要であるが、石見銀山外港の実態把握には県文化財課・市教委ともに積極的に進める方向であり、地元漁協の協力も得られ

ることから海底調査の受入れ環境も十分に整っていることが確認された。

3-3. 潜水確認調査

2009 年 10 月 9 日～12 日にかけて、温泉津湾内の沖泊港口・沖泊港内と温泉津湾沖の立鳥瀬・中の瀬の 4 箇所において潜水確認調査を行った（潜水実働 2 日）。調査方法は能登半島の珠洲で行った潜水調査と同じく、2 名（以上の）一組により浮遊ブイを潜降ロープに使用し、30 m のメジャーテープによる円形サーチによって行い、確認した遺物は写真記録を原則とした。

a. 温泉津湾内「沖泊港口」（図 3-2、写真 3-9）

10 日午前、晴れ。小潮（満潮 3:42(+44.5)、干潮 14:14(+13.6)）。最大水深 15.3 m、水温 22℃、透視度 4 m。港の開口部にブイを投入し（N35°05'0"/E132°20'0"）、30 m のエスロン・メジャーテープを利用し、開口部側の方位角 270°より時計回りに円形サーチを行う。温泉津湾および沖泊港はそれぞれ大小の水没谷によって構成されており、開口部でも陸上の急峻な谷地形が海底に続き、海面上で約 150 m を測る開口部の幅は、水深 15 m 前後の海底面ではさらに狭くなる。ブイ投入地点は開口部のやや南寄りであったが、南北それぞれ約 10 m 内外で砂低質から岩礁域へと移行し、傾斜地形の立上がり確認された。南側はそのまま陸上地形に続くものと思われるが、北側は独立した岩礁である可能性も考えられる。しかし、今回はウネリと透視度の低さのため、海底地形の全容は確認していない。南側の岩礁域斜面において、時期不詳の甕口縁部を確認した他は、近代以前に遡るとと思われる遺物の検出は無かった。

b. 温泉津湾内「沖泊港内」（図 3-2、写真 3-10）

10 日午後①、晴れ。最大水深 6.5 m、水温 22/21℃、透明度 0～3 m。港内中程のテトラポット施設付近に



写真 3-19 中の瀬沖検出の陶器



写真 3-20 立鳥瀬回収の石材

ブイを投入し、港奥部に向かって円形サーチを行う（写真 3-11）（N35°05'0" / E132°20'0" ⇒ N35°05'0" / E132°20'0"）。港内では波高はないものの、海中では外海からのウネリが入り込んでおり、透明度も 0～3m と良くは無い。海底面にはシルトの澱が沈殿しており目視確認は容易ではないものの、調査前に通過した台風により発生したウネリに洗われたためか、テトラポット開口部付近ではシルトの沈殿が少なく、銅製煙管の雁首 1 点（写真 3-12）と近世の肥前系磁器染付 3 点が検出された（写真 3-13・14・15）。この他、在地産陶器と思われる壺・鉢の破片も確認されたが同海域は史跡指定範囲に該当するため遺物の回収は行わず、写真撮影による記録に止めた。

c. 温泉津湾沖「立鳥瀬」（図 3-2）

10 日午後②、晴れ。最大水深 17.0 m、水温 22℃、透視度 4～5 m。弱いウネリがあり、根の周辺ではさらに増す。同海域では多数の石材が散乱しているという目撃情報があり、海底の岩礁の根付近にブイを投入し、根内の目視確認を行い、北側で全長約 1 m の直方体の石材を 20 点以上確認した。数本から 10 本近くの石材が、根内の岩礁の裂け目に手取的して検出されるが（写真 3-16）、陶磁器等の他の遺物は見られなかった。

11 日午前、晴れ。小潮（満潮 4:52(+42.9)、干潮 15:24(+12.7)）。最大水深 13.3 m、水温 22℃、透視度 6～7 m。昨日確認した石材の撮影を行い、サンプルとして数本が集中する地点で、その内の 1 点を回収した（N35°05'0" / E132°20'0"）（写真 3-17・18）。石材分布地点から南側約 10 m の岩礁の裂け目において、近代のものと思われる無数の瓦を確認しており、散在する石材との関連性も考慮される。

d. 温泉津湾沖「中の瀬」（図 3-2）

11 日午後、晴れ。最大水深 19.9 m、水温 23℃、透視度 10 m。中の瀬の沖側にブイを投入し、中の瀬方向に向かってブイを曳きながら移動し目視確認を行う（N35°05'0" / E132°20'0" ⇒ N35°05'0" / E132°20'0"）。海底は砂底と岩礁域が入り混じる起伏に富む地形を呈し、根の水深がやや浅い場所においては、まだ昨日までのうねりが残っている。移動中に近世～近代のものと思われる陶器 1 点を確認した（写真 3-19）。またエクジット・ポイント付近において、瓦片の散在と近代のものと思われる陶磁器が数点確認された。浮上後に瀬の一部にかなり接近していたことが判明したことから、

前記の瓦と陶磁器片は中の瀬に座礁し沈没した近代頃の船の積荷の一部である可能性が高い。

3-4. 回収遺物および海底確認遺物

①回収遺物

a. 切出し石材（写真 3-20）

立鳥瀬（N35°05'0" / E132°20'0"）岩礁内、水深 14.9 m（10/11、11:15）より回収。全長 98.5cm、幅 18.0cm、厚さ 12.0cm を測る（重量未計測）。表面には斜行ノミ痕が全面に確認され、縁辺部には剥離調整が見られる。海棲生物の蚕食痕があり軟質である。温泉津湾周辺で見られる砂岩に近いものか？

②海底確認遺物

沖泊港内のテトラポットが施設された内側において、銅製煙管と近世の肥前系磁器 3 点が確認され、また中の瀬沖では近代のものと思われる陶器 1 点を確認された。

a. 銅製煙管（雁首）（写真 3-12）

b. 肥前系磁器染付紅葉文碗（写真 3-13）

コンニャク印判により紅葉文が施される。1700～1740 年代。

c. 肥前系磁器染付唐草文碗（写真 3-14）

唐草文が施される。1700～1760 年代。

d. 肥前系磁器染付皿（写真 3-15）

蛇の目凹形高台を有する。1800～1860 年代。

e. 施釉陶器（写真 3-19）

岩礁域の水深 16.9 m（10/12、14:35）にて検出。鉢であると思われる、半透明釉を施し高台部分は露胎とする。内面底部には台形状の胎土目を残す。山口県の須佐唐津窯の製品か、あるいは近隣の在地産の近世～近代陶器か？

3-5. 潜水調査の成果と課題

島根県教育庁文化財課世界遺産室、大田市教育委員会教育部石見銀山課および JF しまね温泉津出張所の協力により、石見銀山の積出港の一つとされる温泉津湾内の沖泊港と湾外の立鳥瀬、中の瀬沖において潜水目視調査を行った。沖泊港内では 18 世紀前半～19 世紀にかけての肥前系磁器 3 点と銅製煙管を確認し、立鳥瀬では多数の石材と近代瓦を確認し、中の瀬沖でも近代瓦と陶器を確認し、立鳥瀬の石材 1 点をサンプルとして回収した。

沖泊港内では悪条件の下で 1 回の潜水であったにも関わらず、複数の遺物が確認されており、港内の遺物密度の濃さを示すものであると思われる。完形に近い形状の陶磁器も含まれており、海底下の掘削とまで行かないまでも、海底面の沈殿シルトを除去することにより、多数の遺物検出ができるものと予想され、港湾海底遺跡として目される沖泊港での商業活動の一端を解明することも可能であろう。

立鳥瀬では瓦と石材が集中して確認されており、海底地形の変化に伴う波の影響でバランスを崩した船からの荷崩れや沈没が想定されるが、今回の潜水においては、直接的に船に繋がる遺物は確認されていない。また、石材に近接して近代瓦が集積しており、両者の関連も想定されるが、透視度などの条件が整っていなかったため、周辺部も含めて再調査が必要であろう。

中の瀬沖は温泉津関係者の方もこれまで潜水の機会が無く今に至っていたが、多数の近代瓦と陶磁器の散布が確認された。海底地形から見ても海の難所であることは明らかであり、瀬の近辺を中心に再調査を行うのが有効であると思われる。

(文責 小川)

参考文献

島根県教育庁文化財課世界遺産室『世界遺産 石見銀山遺跡とその文化的景観』2008。

※写真 3-11～15・17～19 は山本祐司が、その他は小川光彦が撮影を行った。また、GPS データは日本測地系である。

4. 越前海岸（福井県）

4-1. 海揚がり品の調査

8 月 18 日午前福井県陶芸資料館（越前町小曾原 120-61）にて資料調査を行なった。

同館所蔵の玄達瀬より引き揚げられた遺物は弥生土器壺、越前焼播鉢、越前焼甕の計 3 点である。

弥生土器壺（写真 4-1a）は弥生時代後期に山陰地方からもたらされたものと考えられる。口径 22cm、最大腹径 35cm、器高 36cm。口縁部が一部欠けており、付着物を洗い落とす際に全面を強くこすったのか、海底にて水性磨耗を受けたためか調整痕は不明瞭である。外面に残る付着物の痕跡から海底では横倒しの状態で半分ほどが海底に埋没した状態にあったものと見られる。

越前焼播鉢（写真 4-1b）は口径 36.2cm・底径

16.4cm・器高 12.7cm、壺（写真 4-1c）は口径 36.8cm・底径 16.1cm・器高 46.2cm を測る。今回調査し得た越前焼資料は田中照久氏が資料紹介をしたもののうち、それぞれ図 5-2 および 6-2、図 5-3 および 6-3 にあたる（田中 1987）。播鉢の播目は 9 条一単位の工具を用いて施されている。底部において工具を 4 回交差させ、体部では工具を下から上に向かって引き上げ、口縁部付近で力を抜いている。

播鉢・甕ともに口縁部から肩にかけて同程度の大きさで付着物の痕跡が認められる。製作時期は 16 世紀。

これらの資料は 1986 年 2 月に甘エビ漁の最中に引き上げられたものであり、「大甕の中に播鉢・甕が入り子状に詰められ（田中 1987:121）」、器の大部分が海底に埋もれていた状況が推察される。

播鉢・甕ともに使用した形跡が認められず、引き揚げ時には入れ子状になっていたことから、焼き物を積んだ船が越前海岸を出港して玄達瀬海域で遭難して沈没したか、遭難を回避するために積荷を海に投棄したものと推測される。

今回実見がかなわなかったが同海域より引き揚げられた遺物として 1982 年 2 月に玄達瀬の海底 270m より引き揚げられた越前大甕が 1 点存在する。

同日午後北前船歴史資料館（南越前町河野 2-15）・河野歴史資料館（南越前町河野 2-29-1）を見学した。北前船歴史資料館は北前船の船主であった右近家当主の屋敷を資料館として改装したものであり、右近家ならびに村内に伝わる北前船関連資料が展示されている。河野歴史資料館には、大正 13 年 12 月に南越前町河野地区糟において座礁した特務艦「関東」の船体の一部が展示されている。

なお今年度は若狭地方については調査を実施できなかった。『若狭守護代記』などによれば、応永 15 年(1408)に象を乗せた南蛮船が入港したという。同地においても海揚がり遺物の存在が知られている。『越前町史 上巻』（1977）にはキツジマ沖海底より底曳網漁にて引き揚げられた弥生土器が紹介されている（写真 4-1d）。また若狭歴史民俗資料館には、平成 2 年に小浜市矢代海岸に漂着した南宋時代（13 世紀）の迦樓羅王立像（写真 4-1e）が所蔵されている。これらについても来年度以降、資料化を行っていく必要がある。

4-2. 海岸踏査 (写真 4-2)

8月18日午後は敦賀市赤碕から越前町梅浦にかけて、翌19日は越前町梅浦から坂井市三国港にかけての範囲で予備踏査を実施した。

越前海岸は、福井県敦賀市杉津から越前岬を経て坂井市三国町安島の東尋坊に至る海岸の総称である。北部は九頭竜川の沖積作用で形成された比較的平坦な地勢であり沿岸部には海岸砂丘および砂浜が発達している。今回踏査を行った福井市北西部から敦賀市にかけては急峻な海岸段丘や海食崖が続く。

海岸段丘の間に小規模な砂浜や礫浜が点在するが、テトラポットや防波堤が敷設されているなど、徒歩による海岸踏査が可能な場所は限られる。わずかな踏査地点においても現代の漂着ゴミが見られるものの、陶磁器などの遺物は確認できなかった。今後は船舶を利用した踏査も考慮すべきであろう。

(文責 酒井)

参考文献

- 越前町史編纂委員会 1977『越前町史上巻』越前町役場。
 福井県陶芸館 1990『越前若狭の貿易陶磁展』。
 田中照久 1987「玄達瀬から発見された越前焼」『福井考古学会会誌』5: 121-134. 福井考古学会。
 福井県立美術館 2008『美術館だより』第118号。

5. 新潟県

5-1. 佐渡沖海底の珠洲焼—海揚がり品の報告—

2010年2月12日(金)～同月14日(日)にかけて、日本海域における古代から中世の物流を裏付ける資料を確認する目的で、新潟市内などの博物館等に保管されている海揚がり品の資料調査を実施した。参加者は、佐々木達夫、垣内光次郎、酒井 中、松井広信、田崎稔也、塩澤隆慈の5名で、各所の収蔵品調査を行い新規の海上がり遺物も確認できたことから、成果の一部を速報的に報告する。

報告の佐渡沖海底の珠洲焼(図5-1)とは、新潟市「横井の丘ふるさと資料館」(旧豊栄市)に展示されている珠洲焼の大壺で、2月12日の調査で実測図の作成と写真撮影に実施した。壺は旧豊栄市浦ノ入出身の畠山佑二(故人)が収集した考古学コレクションの一つであり、1987年に豊栄市立博物館へ寄贈され資料館の展示品となったものである。壺の肩には「佐渡沖海底 明治四十年」と墨書された和紙の短冊が貼られ、海揚がり品であることを明示しているが、内面には大きな貝殻付着痕が残り、外面を中心に器面の水性摩耗がみられることから、佐渡沖海底とする注記には問題が無い。

珠洲焼は体部を叩き仕上げとした大壺で、タタキ目は綾杉状を呈する。口縁部の約8分の7を欠損するものの、形状の全形が知られる。法量は口径18.4cm、器

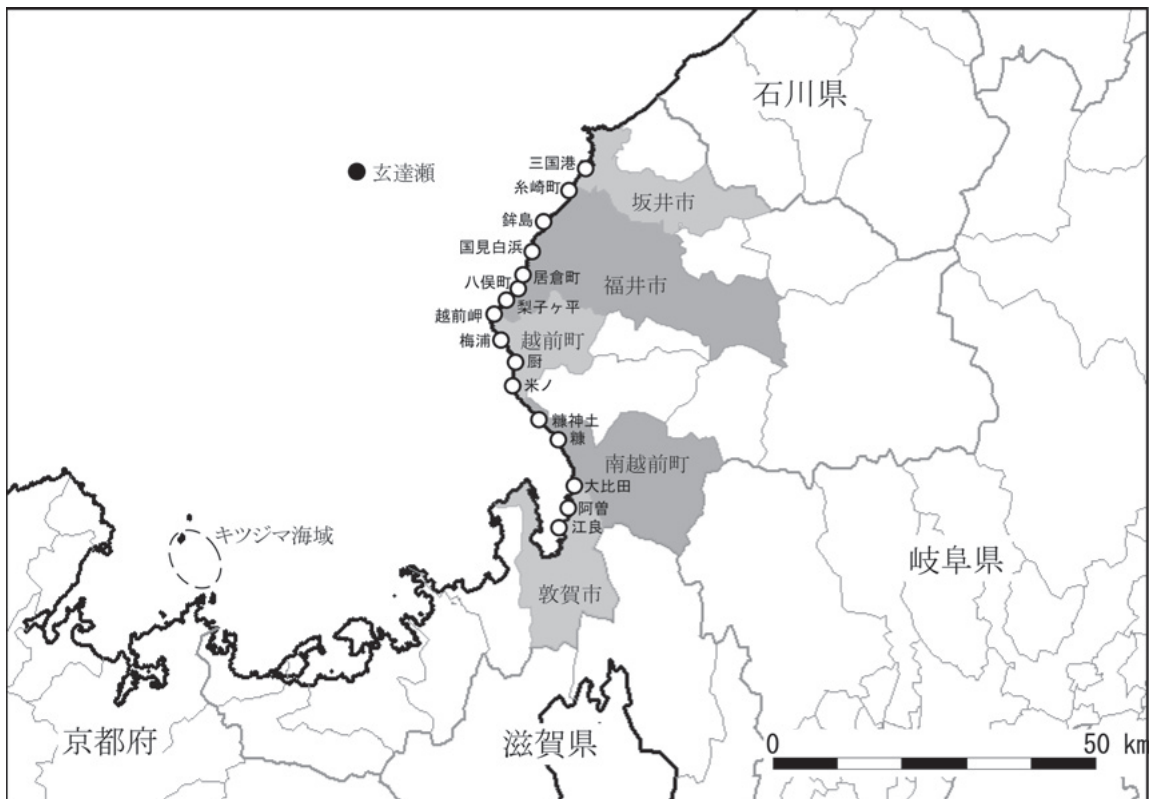


図 4-1 踏査範囲および海底遺跡

高 48.3 cm、底径 13.3 cmを測り、口縁から肩部に軽い焼き歪みが見られる。胎土は内外とも明灰色を呈し、砂粒の含みが多いながらも精良である。外面のタタキ目は、3 cm幅あたり 11 本と密であり、使用する原体は 3.6 cm前後とみられる。また、器形をみると鉢造りの底部に球体形の体部を重ね、口縁を大きく外反させている。底部の鉢造りはやや厚手となり、体部の積み上げも器厚な仕上げとなっている。頸部から口唇部のヨコナデは、少し粗く外面に水引痕を残している。

以上の諸点からするとこの珠洲焼の大壺は、珠洲焼編年のⅡ期（12 世紀末～13 世紀前半）段階の製品と判断されると共に、鎌倉時代に能登半島先端部の珠洲窯で生産させた貯蔵容器が、佐渡の近海を通過する海路で搬送される途中、事故などで日本海に沈んだものと考えられる。

（文責 垣内）

5-2. 新潟県内出土の海揚がり中近世遺物

2010 年 2 月 12 日（金）～同月 14 日（日）にかけて、新潟県内の博物館等で実施した海揚がり遺物の資料調査において確認した珠洲焼 2 点と外輪船シャフトについて報告する。

寺泊民俗資料館では、海揚がりの珠洲焼片口鉢 1 点と幕末の運搬船である順動丸の外輪シャフトが所蔵されている。今次調査では写真撮影及び寸法計測を実施した。片口鉢（写真 5-1）は珠洲焼編年Ⅲ期の製品で、口縁の一部を欠損する。口径 31.5cm、底径 14.5cm、器高 11.5cm を測る。8 つの播目が放射状に施される。順動丸の外輪シャフト（写真 5-2）は、全長が 3.25 m におよぶ。寺泊で停泊していたところを薩長軍による砲撃を受け轟沈、その後引き揚げられたものである。

上越市名立区において、名立漁業組合会長である小林秋夫氏に海揚がり品などの聞き取り調査を実施した。その際、小林氏が底引き漁で引き揚げ、現在も所有している遺物を実見する機会を得た。引き揚げた遺物は完形の珠洲焼水注である（写真 5-3a）。口径 2.8cm、底径 5.8cm、器高 16cm を測り、体部の両側に秋草文が描かれ（写真 5-2b）、取手部分の背には下綾杉状の沈線文が配される（写真 5-3c）。珠洲焼では数が少ない製品で、その基本器形から珠洲焼編年Ⅳ期（14 世紀代）頃の遺物とみられる。

小林氏によれば、貝殻の付着状態は引き揚げた当時

のままであるとのことであり、頸部には多毛類の棲管が集中している。水注を引き揚げたのは昭和 50 年代で、鳥ヶ首岬より北西の方角沖合約 10 マイル、水深 500 ～ 600 m の海域で、底引き網漁していたところ、泥中に埋没していたものが、網に引っ掛かったとのことである。水深が深いところであることから、天候の影響は受けていなかったと思われる。

名立区に残る引き揚げ遺物の事例としては、昭和 60 年頃に名立灯台より北西の方角、水深 150 m 付近の海底より、底引き網漁によって珠洲焼の甕・壺・播鉢が数点発見され、現在は名立区公民館に展示されている。

海揚がり遺物が発見されたのは当時のみであり、その後は発見された事が少ないようである。これは遺物の引き揚げた時期が、昭和 50 年代のはじめ（底引き網漁がこの地に導入された時期と重なる）から昭和 60 年（政策の転換に伴い底引き網漁ができなくなった）以前に限られており、底引き網漁がおこなわれていない現在では、新規の遺物引揚の可能性は低いのではないかと考えられる。（文責 松井・塩澤・田崎）

6. アンケート調査

水中文化遺産データベース作成のための情報収集および、アンケートを通じた水中考古学の理解を目的としたアンケート調査を平成 21 年 11 月～12 月にかけて実施した。調査対象は北海道から山口県にかけての日本海海域に面した道府県および市町村教育委員会などの文化財担当機関、当該地域において操業している漁協、ダイビングショップからなり総計 750 件におよぶ。

6-1. 集計結果

平成 21 年 11 月 15 日 各関係府県の教育委員会・漁協・ダイビングショップ・にアンケートを発送した。平成 21 年 11 月末日を締め切りとしたが、実際には 12 月中旬以降に回答を返送する事例も多くみられ、これらについても集計を行なっている。

なお、北海道のダイビングショップに関しては来年度に実施予定であり、今回は対象から外している。同じく北海道の漁協に関しても来年実施予定であるが、印刷費の都合上、9 件だけ前倒しで実施対象に含めた。

発送した 750 件のうち漁協 3 件、ダイビングショップ 20 件については、宛先に該当なし等の理由で返戻となった。事業所の統廃合および廃業、移転等の理由に

よるものと考えられる。教育委員会等の行政機関の回答率は新潟・富山で 100%に達し、最小でも京都・兵庫の 33.3%に達し軒並み高い回答率を示す。山形県の漁業機関より寄せられた回答は皆無であるものの、同県における行政機関の回答率のおおむね 3～4 分の 1 程度の回答率を示す。その一方でダイビングショップの回答率は低く、京都府の 4.5%から鳥取県の 57.1%までバラツキが見られた。

業種の垣根を取り払った道府県別の回答率は最小値が京都府の 17.2%、最大値が富山県の 55.4%であり、北陸地域の道府県ごとの回答率がいずれの件においても 36%を超えるなど高い関心を寄せていることが見て取れる。全体の回答率は 25%を超えており、サンプル母集団としては有効な数字が得られたものと考えられる。

6-2. アンケート調査により寄せられた水中文化遺産

アンケート調査は回答者が情報を記入する形態をとった。選択回答形式のアンケートと異なり、回答者に応じて実際には該当地域で周知の水中文化遺産が回答されていないケースも存在すると考えられる。集計にあたって、内容を吟味して同一の対象と判断できる場合は、複数の回答が寄せられても 1 件とした。なお、質問内容は以下の 4 点である。

- Q.1 土器や陶磁器などの焼物、その他の人工物を引揚げた、或いはそれらが集中して見つかる海域
- Q.2 土器や陶磁器などの焼物、その他の人工物が採集される海岸
- Q.3 引揚げられた遺物の所有者および連絡先
- Q.4 沈没船あるいは積荷などの伝承・記録

Q.1 については 79 件の情報が寄せられ、土器・陶磁器といった焼き物の引き揚げ事例が 33 件と最も多く、沈没船の船体に関する事例は 7 件にとどまる。道府県別の件数としては新潟県が 15 件で最も多い。秋田・福井が 9 件、鳥取が 8 件、青森・石川の 6 件と続き、引き揚げ事例皆無の道府県は存在しない。

Q.2 については引き揚げ事例に比べると日本海域全体で 24 件と少ない。都道府県ごとの件数もさまざまであり、文化財行政部門担当者の水中遺跡に対する認識に左右されているものとみられる。

Q.3 については 62 件の情報が寄せられ、うち 17 件が新潟県に集中している。所有者の内訳はグラフ 1 に示

した通りであるが、約 6 割の 38 件が博物館・教育委員会・学校といった社会教育施設に集中している。その一方で、個人所有が 12 件存在する。水中遺跡が必ずしも文化財保護法によって保護されるものではなく、現状では各自治体の判断に委ねている実態が垣間見える。

Q.4 は 55 件が寄せられ、31 件の文字記録に基づくものと、24 件の伝承からなる。伝承のうち 2 件は場所は異なるものの出来事を伝えるものとみられる。

(文責 酒井)

7. 研究会活動

今年度は日本海域水中考古学会と共同で、調査成果の検討と水中考古学の理解を目的とした研究会・フォーラム・公開講座等を行なった。

- ・2009 年 4 月 16 日 (木) 研究会

会場：金沢大学考古学研究室

ナンチーチーカイ (金沢大学大学院生)「X線回折法からミャンマー陶器の研究」、酒井 中 (金沢大学大学院生)・垣内光次郎 (石川県埋蔵文化財センター)・佐々木達夫 (金沢大学教授)「日本海に流通した備前焼を元素分析から探る」

- ・2009 年 5 月 14 日 (木) 研究会

会場：金沢大学考古学研究室

戸根比呂子 (日本海域水中考古学会会員)「加賀市域の海揚がり遺物」、垣内光次郎 (日本海域水中考古学会会員)「海揚がりの須恵器ー能登半島周辺の海域についてー」

- ・2009 年 7 月 16 日 (木) 研究会

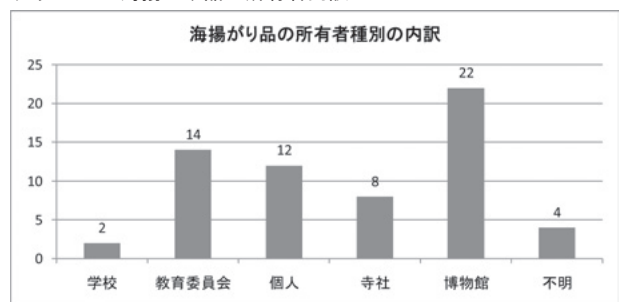
会場：金沢大学考古学研究室

佐々木達夫 (金沢大学教授)「珠洲市海岸の調査成果と課題」、小川光彦 (金沢大学大学院生)「夏の調査地と調査方法について」

- ・2009 年 9 月 7 日～10 日 水中考古学集中講義

地域考古学特論 / 考古学特殊講義 / 日本考古学 B

グラフ 6-1 海揚がり品の所有者内訳



講師：林田憲三（NPO 法人アジア水中考古学研究所 理事長）

- ・2009 年 9 月 12 日（土）公開フォーラム「能登の海と海底に沈む歴史」 珠洲市共催 北国新聞社後援

会場：珠洲焼資料館

西山郷史（日本海域水中考古学会副会長）「地域の伝統と海の交流」、平田天秋（珠洲市文化財審議会会長）「珠洲焼の生産と日本海流通」、大安尚寿（珠洲焼資料館）「海揚げりの珠洲焼」、野上建紀（有田町歴史民俗資料館）「伊万里の日本海流通」、中野雄二（波佐見町教育委員会）「波佐見くらわんか茶碗の広がり」、榎谷秀一（写真家 珠洲市在住）「海岸で陶磁器を拾う」、九千房百合（陶磁器研究家 珠洲市在住）「姫島周辺に沈む焼きもの」、小川光彦（金沢大学大学院生）「水中考古学の調査風景」、澤田正昭（国士舘大学教授）「地域文化遺産の保存と活用ー沈没船保存の現状と課題ー」

- ・2009 年 11 月 19 日（木）研究会

会場：金沢大学角間人間社会 2 号館第 2 会議室

石村 智（奈良文化財研究所）「パラオ共和国における第二次世界大戦の沈船調査」、酒井 中（金沢大学大学院生）「海難資料と沈船」、小川光彦（金沢大学大学院生）「日本海海域における踏査と海底調査」

- ・2010 年 1 月 30 日（土）金沢大学公開講座「日本海の海上交通史と水中考古学」 主催：金沢大学地域連携推進センター

会場：金沢大学サテライトプラザ

佐々木達夫（金沢大学教授）「考古学から日本海に沈む歴史を探る」、佐々木花江（金沢大学准教授）「海底から引き揚げられた陶磁器と金沢の城下町発掘品」、垣内光次郎（石川県埋蔵文化財センター）「内灘砂丘に埋もれた海岸の遺跡と日本海交易」、小川光彦（日本海域水中考古学会常務理事）「沈没船と積み荷の海底調査風景」

- ・2010 年 3 月 13 日（土）研究会

会場：石川県文教会館

鶴巻康志（新発田市教育委員会）「越後における古代・中世の剝舟」、垣内光次郎（石川県埋蔵文化財センター）「能登の獵舟」、小川光彦（日本海域水中考古学会常務理事）「鉄錨の研究について」、松井広信（日本海域水中考古学会会員）「新潟県海揚げり品調査」

8. おわりに

本研究は日本財団の研究助成（「海の文化遺産総合調査プロジェクト」）を受けた NPO 法人アジア水中考古学研究所（研究代表者 林田憲三）と金沢大学（研究代表者 佐々木達夫）の共同研究により行なわれた。ご支援、ご協力をいただいた林田理事長始めアジア水中考古学研究所の皆様、研究を遂行した日本海域水中考古学会の会員の皆様に感謝。

調査参加者・協力機関

青柳洋治、浅黄屋、浅田昌平、石川県漁業共同組合 ずず支所、石村 智、今田善寿、大田市教育委員会 教育部石見銀山課、大安尚寿、小川光彦、垣内光次郎、九千房信雄、九千房百合、河野歴史資料館、小林秋夫、酒井 中、坂下博晃、坂本圭祐、佐々木達夫、佐々木花江、JF しまね温泉津出張所、塩澤隆慈、島根県教育庁文化財課世界遺産室、上越市教育委員会、珠洲市教育委員会、第三寿丸（櫻屋敷忠）、竹澤 茂、竹野博正、田崎稔也、椿 真治、手塚希望、戸根比呂子、中木紗友美、中田健一、中野雄二、長嶺康典、ナンチーチーカイ、新潟市教育委員会、日本海域水中考古学会、野上建紀、平田天秋、プルミンゴ温泉津、榎谷秀一、松井広信、三ツ石元、宮本眞晴、目次謙一、守岡正司、山本祐司、米田初男、谷内尾晋司、渡邊 玲（敬称略・50 音順）

表 2-1. 日本海海域における海底遺跡・引揚げ遺物

	都道府県	所在地・遺跡名	種別	時期	参考文献
1	北海道	厚岸町	石器	縄文	文化庁 2000
2		江差町・開陽丸	沈没船	幕末	文化庁 2000
3		上ノ国町	陶磁器	中世～近代	文化庁 2000
4	青森県	市浦村	陶磁器	近世	文化庁 2000
5		むつ市	陶磁器	近世	文化庁 2000
6		脇沢野村	陶磁器	江戸・明治以降	文化庁 2000
7	山形県	鶴岡市温海沖	珠洲焼	中世	吉岡 1994、大安 2005
8	新潟県	上越市名立沖	珠洲焼	中世	室岡 1972、吉岡 1994、大安 2005
9		柏崎市沖	珠洲焼	中世	吉岡 1994、大安 2005
10		長岡市寺泊沖（含佐渡島近海）	珠洲焼	中世	吉岡 1994、大安 2005
11		村上市岩船沖（含粟島近海）	珠洲焼	中世	吉岡 1994、大安 2005
12	富山県	氷見市比美町	土器	飛鳥・奈良	文化庁 2000
13	石川県	珠洲市飯田町沖	珠洲焼	中世	吉岡 1994、大安 2005
14		珠洲市飯田海岸	珠洲焼・伊万里焼	中・近世	大安 2005
15		珠洲市上戸町沖	珠洲焼	中世	大安 2005
16		珠洲市宝立町沖	珠洲焼	中世	大安 2005
17		珠洲市狼煙町沖	須恵器	平安	大安 2005
18		能登町小木沖	珠洲焼	中世	大安 2005
19		能登町宇出津沖	珠洲焼	中世	大安 2005
20		輪島市沖	珠洲焼	中世	大安 2005
21		輪島市舳倉島沖	珠洲焼	中世	吉岡 1994、大安 2005
22		輪島市町野町曾々木沖	珠洲焼	中世	大安 2005
23		穴水町中居沖	珠洲焼	中世	吉岡 1994、大安 2005
24		七尾市和倉沖	珠洲焼	中世	吉岡 1994、大安 2005
25		志賀町大島海岸	陶磁器	—	個人資料
26		輪島市大沢海岸沖	タイ陶器壺	中世	垣内 1995
27		能登半島沖公海	肥前磁器染付	17 世紀末	野上 1998、宮田 2005
28		加賀市柴山町・柴山潟底遺跡	貝塚	縄文	文化庁 2000
29		加賀市柴山町・柴山水底遺跡	土器	弥生	文化庁 2000
30	加賀市橋立町	安政小判	近世	文化庁 2000	
31	福井県	坂井市三国町沖玄達瀬	越前焼	中世	田中 1987、岩田 2005
32	鳥取県	境港市・北灘遺跡	土器・石器	縄文～飛鳥・奈良	文化庁 2000
33		境港市・西灘遺跡	土器	縄文	文化庁 2000
34	島根県	益田市中須町・鴨島海底遺跡	—	—	文化庁 2000
35		太田市温泉津町沖泊（湾内）	有田焼	近世	山陰中央新報 2006
36	山口県	萩市大井馬場下	中国スタイル礎石	中世	萩市史編纂委員会 1987

表 6-1 発送件数

都道府県	教委	漁協	D.S	総数
北海道	38	9	-	47
青森県	16	61	15	92
秋田県	12	24	8	44
山形県	4	8	7	19
新潟県	10	29	23	62
富山県	10	21	10	41
石川県	16	34	17	67
福井県	12	38	28	78
京都府	6	22	22	50
兵庫県	3	7	42	52
鳥取県	10	24	11	45
島根県	10	54	12	76
山口県	5	49	23	77
計	152	380	218	750

表 6-2 回答件数

都道府県	教委	漁協	D.S	総数
北海道	13	2	-	15
青森県	9	10	2	21
秋田県	6	3	3	12
山形県	2	0	2	4
新潟県	10	7	7	24
富山県	10	6	3	19
石川県	9	7	6	22
福井県	9	6	5	20
京都府	2	3	1	6
兵庫県	1	2	5	8
鳥取県	6	3	4	13
島根県	6	8	1	15
山口県	2	11	2	15
計	85	68	41	194

表 6-3 宛先不明等による返戻件数

都道府県	教委	漁協	D.S	総数
北海道	0	0	-	0
青森県	0	2	2	4
秋田県	0	0	2	2
山形県	0	0	0	0
新潟県	0	0	3	3
富山県	0	0	2	2
石川県	0	0	3	3
福井県	0	0	1	1
京都府	0	0	0	0
兵庫県	0	0	1	1
鳥取県	0	0	4	4
島根県	0	1	0	1
山口県	0	0	2	2
計	0	3	20	23

表 6-4 有効回答率 (%)

都道府県	教委	漁協	D.S	県別平均
北海道	34.2	22.2	-	28.2
青森県	56.3	16.9	15.4	29.5
秋田県	50.0	12.5	37.5	33.3
山形県	50.0	0.0	28.6	26.2
新潟県	100.0	24.1	35.0	53.0
富山県	100.0	28.6	37.5	55.4
石川県	56.3	20.6	42.9	39.9
福井県	75.0	15.8	18.5	36.4
京都府	33.3	13.6	4.5	17.2
兵庫県	33.3	28.6	12.2	24.7
鳥取県	60.0	12.5	57.1	43.2
島根県	60.0	15.1	8.3	27.8
山口県	40.0	22.4	9.5	24.0
業種別平均	57.6	17.9	25.6	33.8

表 6-5 情報が寄せられた回答件数

都道府県	教委	漁協	D.S	総数
北海道	6	0	-	6
青森県	5	0	0	5
秋田県	4	0	1	5
山形県	2	0	1	3
新潟県	8	2	3	13
富山県	7	0	0	7
石川県	4	0	2	6
福井県	5	3	2	10
京都府	0	1	0	1
兵庫県	0	0	3	3
鳥取県	3	0	0	3
島根県	3	1	0	4
山口県	2	0	0	2
計	49	7	12	68

表 6-6 情報皆無の回答件数

都道府県	教委	漁協	D.S	総数
北海道	7	2	-	9
青森県	3	8	0	11
秋田県	2	3	0	5
山形県	0	0	1	1
新潟県	2	5	1	8
富山県	3	6	1	10
石川県	5	7	1	13
福井県	4	3	2	9
京都府	2	2	1	5
兵庫県	1	2	0	3
鳥取県	3	3	0	6
島根県	3	6	1	10
山口県	0	11	0	11
不明		2		2
計	35	58	8	101

表 6-7 海揚げり品および海底で発見される事例

都道府県	種別	時代	現状
北海道	鉄錨	近世	博物館蔵
北海道	鉄錨	近世	博物館蔵
北海道	鉄錨	近世	教育委員会蔵
北海道	石製品	近世	寺社保持
青森県	土器・陶磁器	時期不詳	博物館蔵
青森県	土器・陶磁器	時期不詳	海底
青森県	船体	近代以降	海底
青森県	鉄錨	近世	教育委員会蔵
青森県	鉄錨	近世	海底
青森県	鉄製品	時期不詳	海底
青森県	銅板	近世	寺社保持
秋田県	鉄錨	近世	海底
秋田県	石製品	近世	寺社保持
秋田県	石製品	近世	寺社保持
秋田県	石製品	時期不詳	寺社保持

秋田県	石製品	時期不詳	寺社保持
秋田県	石製品 / 鉄製品	時期不詳	不明
秋田県	木彫仏像	時期不詳	寺社保持
秋田県	不詳	時期不詳	不明
秋田県	不詳	時期不詳	不明
山形県	土器・陶磁器	近世	博物館蔵
山形県	土器・陶磁器	中世	博物館蔵
山形県	土器・陶磁器	古代	博物館蔵
山形県	土器・陶磁器	古代	個人蔵
山形県	土器・陶磁器	時期不詳	不明
新潟県	土器・陶磁器	古墳～中世	教育委員会蔵
新潟県	土器・陶磁器	弥生～中世	博物館蔵
新潟県	土器・陶磁器	弥生～古代	個人蔵
新潟県	土器・陶磁器	中世	教育委員会蔵
新潟県	土器・陶磁器	中世	博物館蔵
新潟県	土器・陶磁器	中世	博物館蔵

表 6-7 海揚がり品および海底で発見される事例（つづき）

新潟県	土器・陶磁器	中世	博物館蔵	福井県	船体	近代以降	博物館蔵
新潟県	土器・陶磁器	中世	個人蔵	福井県	船体	近代以降	海底
新潟県	土器・陶磁器	古代	博物館蔵	福井県	武器・弾薬	近代以降	博物館蔵
新潟県	土器・陶磁器	古代	教育委員会所蔵	福井県	船体	近代以降	不明
新潟県	鉄锚	近世	博物館蔵	福井県	仏像	中世	寺社保持
新潟県	鉄锚	近世	海底	福井県	仏像	中世	博物館蔵
新潟県	鉄锚	近代以降	不明	福井県	船体	近代以降	個人所有
新潟県	船体	近代以降	博物館蔵	京都府	土器・陶磁器	弥生時代	個人蔵
新潟県	遺構	時期不詳	不明	京都府	武器・弾薬	近代以降	不明
富山県	土器・陶磁器	近世	博物館蔵	兵庫県	地形改変?	時期不詳	海底
富山県	土器・陶磁器	縄文	不明	島根県	土器・陶磁器	近世	不明
富山県	石製品	近世	不明	島根県	土器・陶磁器	弥生	教育委員会所蔵
富山県	埋没林	縄文	海底	島根県	土器・陶磁器	弥生	博物館蔵
富山県	埋没林	縄文	海底	島根県	土器・骨角器など	縄文～弥生	不明
富山県	不詳	時期不詳	海底	島根県	陶磁器・石製品	不詳	不明
石川県	土器・陶磁器	中世	個人蔵	島根県	石製品	近世	海底
石川県	土器・陶磁器	中世	個人蔵	島根県	地形改変?	時期不詳	海底
石川県	土器・陶磁器	古代	不明	島根県	不詳	時期不詳	個人蔵
石川県	土器・陶磁器	古墳 / 古代	博物館蔵	鳥取県	土器・石器など	縄文～弥生	不明
石川県	土器・陶磁器	古墳 / 古代	博物館蔵	鳥取県	土器	縄文～弥生	教育委員会所蔵
石川県	船体	近代以降	海底	鳥取県	地形改変?	時期不詳	海底
石川県	埋没林	時期不詳	海底	鳥取県	不詳	時期不詳	海底
福井県	土器・陶磁器	弥生～中世	博物館蔵	鳥取県	不詳	時期不詳	不明
福井県	土器・陶磁器	時期不詳	不明	山口県	不詳	時期不詳	不明

表 6-8 海岸での採集事例

都道府県	所在地	種別	時代	現状
北海道	羽幌町大字焼尻字白浜	不詳	時期不詳	不明
北海道	松前郡松前町字松城 小松前川河口	陶磁器	近世～近現代	不明
北海道	松前郡松前町字唐津 唐津内川河口	陶磁器	近世～近現代	不明
青森県	つがる市木造こしみず神田遺跡	土器	縄文（後）・続縄文	散布地
青森県	五所川原市十三湊遺跡付近の十三湖西岸砂州	陶磁器	中世以降	護岸工事に伴い消滅
秋田県	男鹿市船越海岸	不詳	時期不詳	不明
新潟県	出雲崎町久田地内・海岸	不詳	時期不詳	不明
富山県	氷見市蛇が島	土器・石器	縄文	不明
富山県	氷見市蛇が島	石垣石材	近世～近現代	現地に散乱
石川県	輪島市大沢海海岸	タイ産壺	中世	嵯峨井コレクション（宝達志水町）
石川県	かほく市大海川～高松 SA	須恵器	古墳 / 古代	不明
石川県	白山市相川新雁田川遺跡	土器	弥生・古墳	不明
石川県	白山市浜相川相川新遺跡	土器	弥生・古墳	石川県埋蔵文化財センター
石川県	白山市徳光遺跡	土器	縄文	不明
福井県	南越前市河野村糠	機雷	近現代	不明
福井県	小浜市矢代地区海岸	仏像	中世	若狭歴史民俗資料館
福井県	小浜市小浜白鳥海岸	土器・陶磁器	時期不詳	小浜市教育委員会
福井県	高浜町和田釈迦浜	不詳	不詳	不明
兵庫県	美方郡香美町佐津海岸	土器・陶磁器	不詳	不明
島根県	松江市三保関町池ノ尻遺跡中汀線	土器・石器	縄文	不明
鳥取県	鳥取市福部町直浪遺跡沖約 50m	不詳	弥生・古墳?	不明
鳥取県	鳥取市鳥取砂丘	不詳	縄文～中世?	不明
鳥取県	境港市外江町海岸約 40m、100m 地点	不詳	不詳	不明
山口県	不詳	元寇の碇石	中世	萩市指定文化財

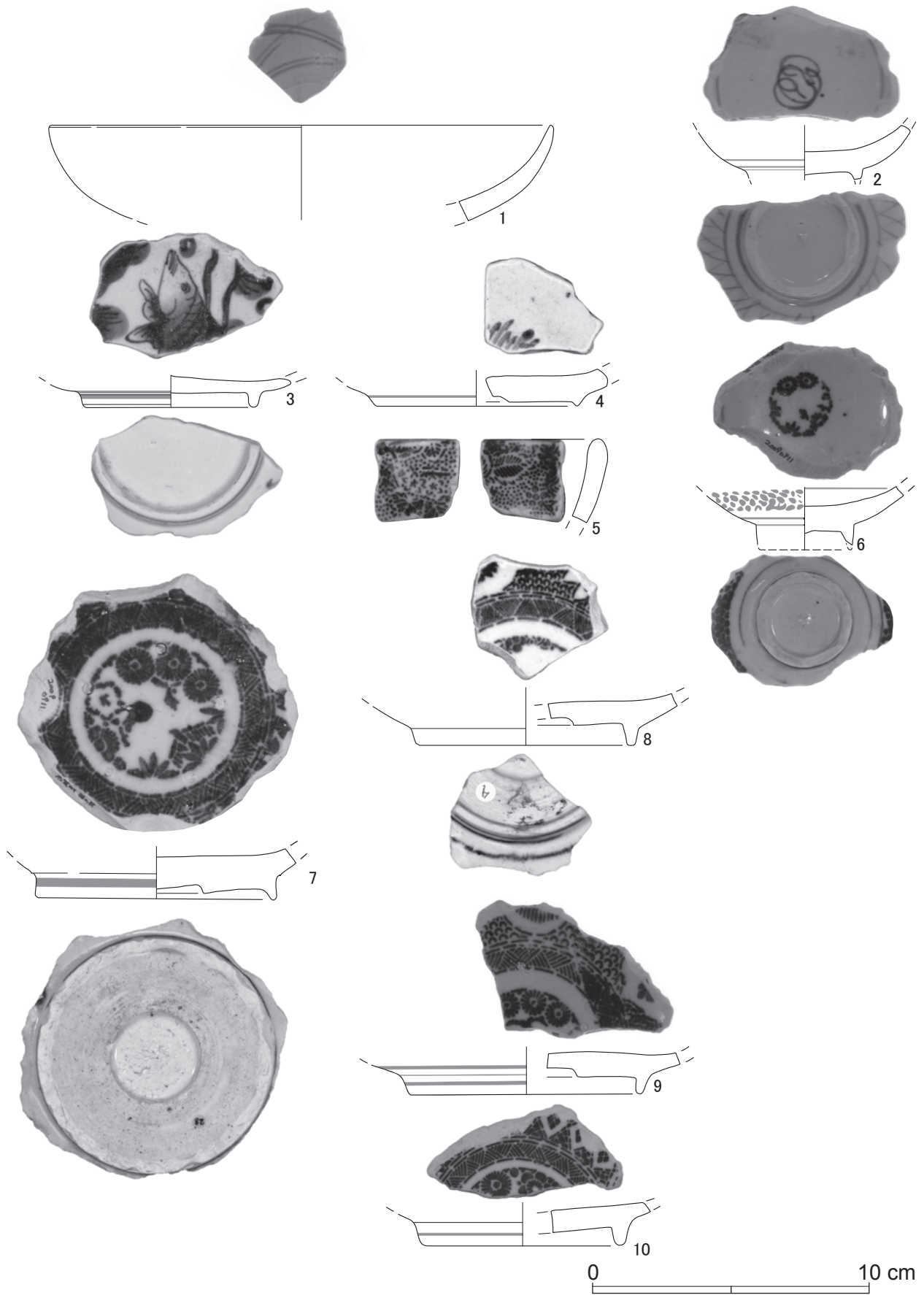


図 1-3 志賀町福浦海岸（田の尻）表面採集品 <S=1/2>

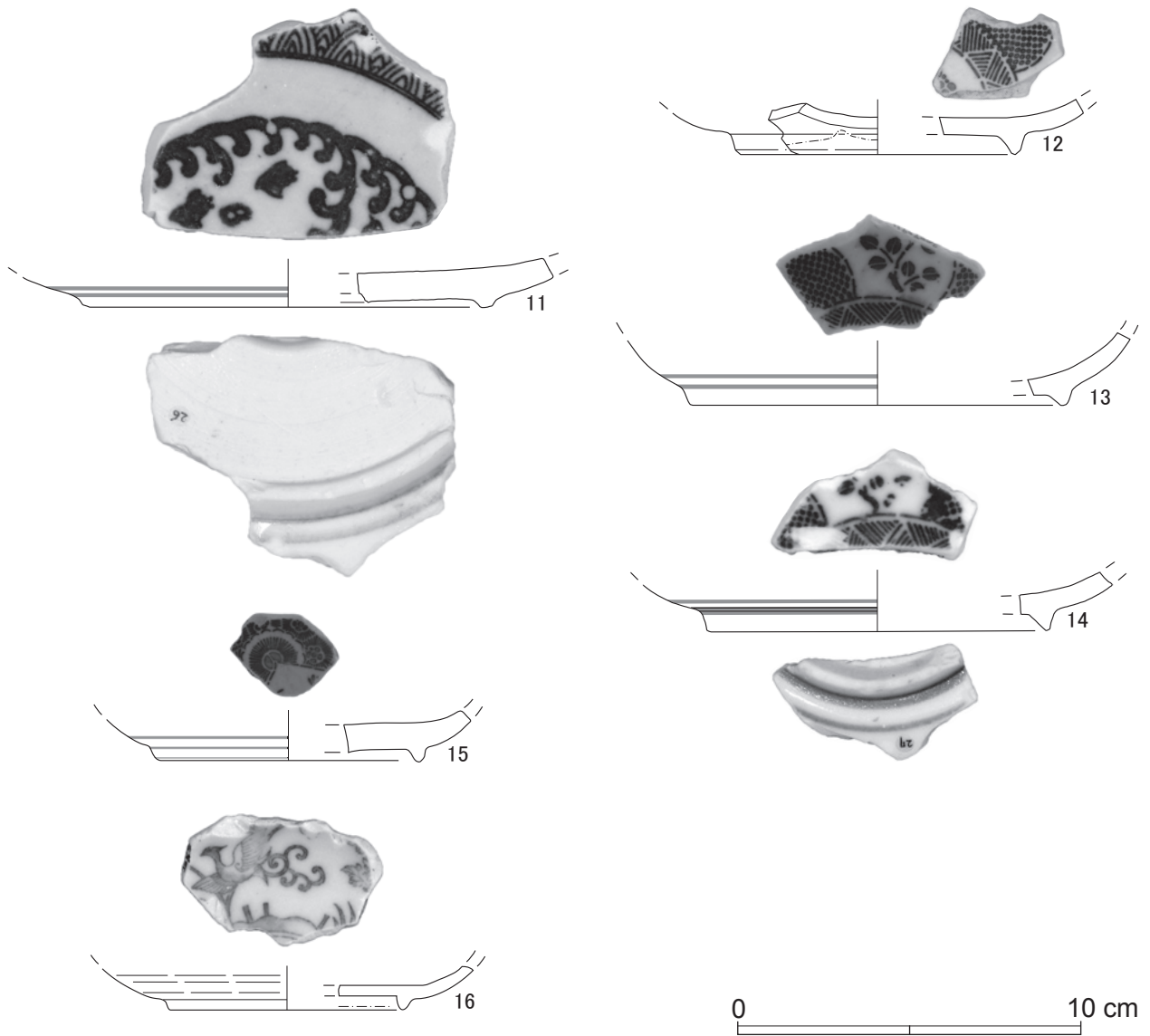


図 1-4 志賀町福浦海岸（田の尻）表面採集品 <S=1/2>(2)

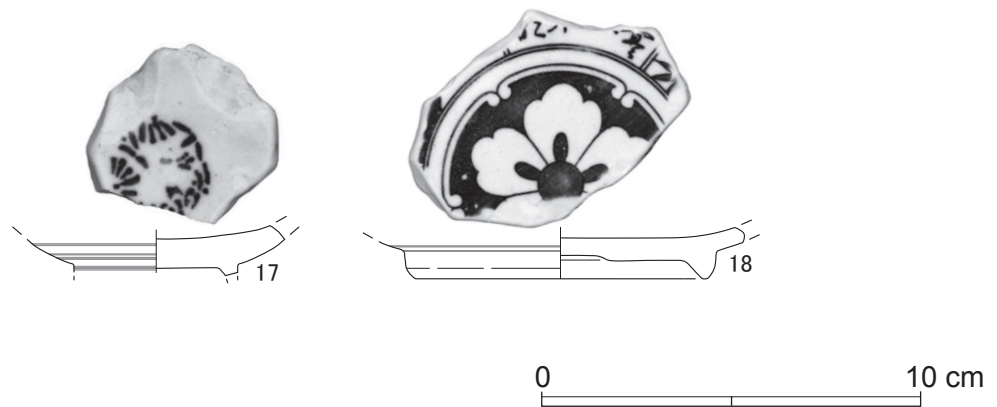


図 1-5 珠洲市木ノ浦海岸 表面採集品 <S=1/2>

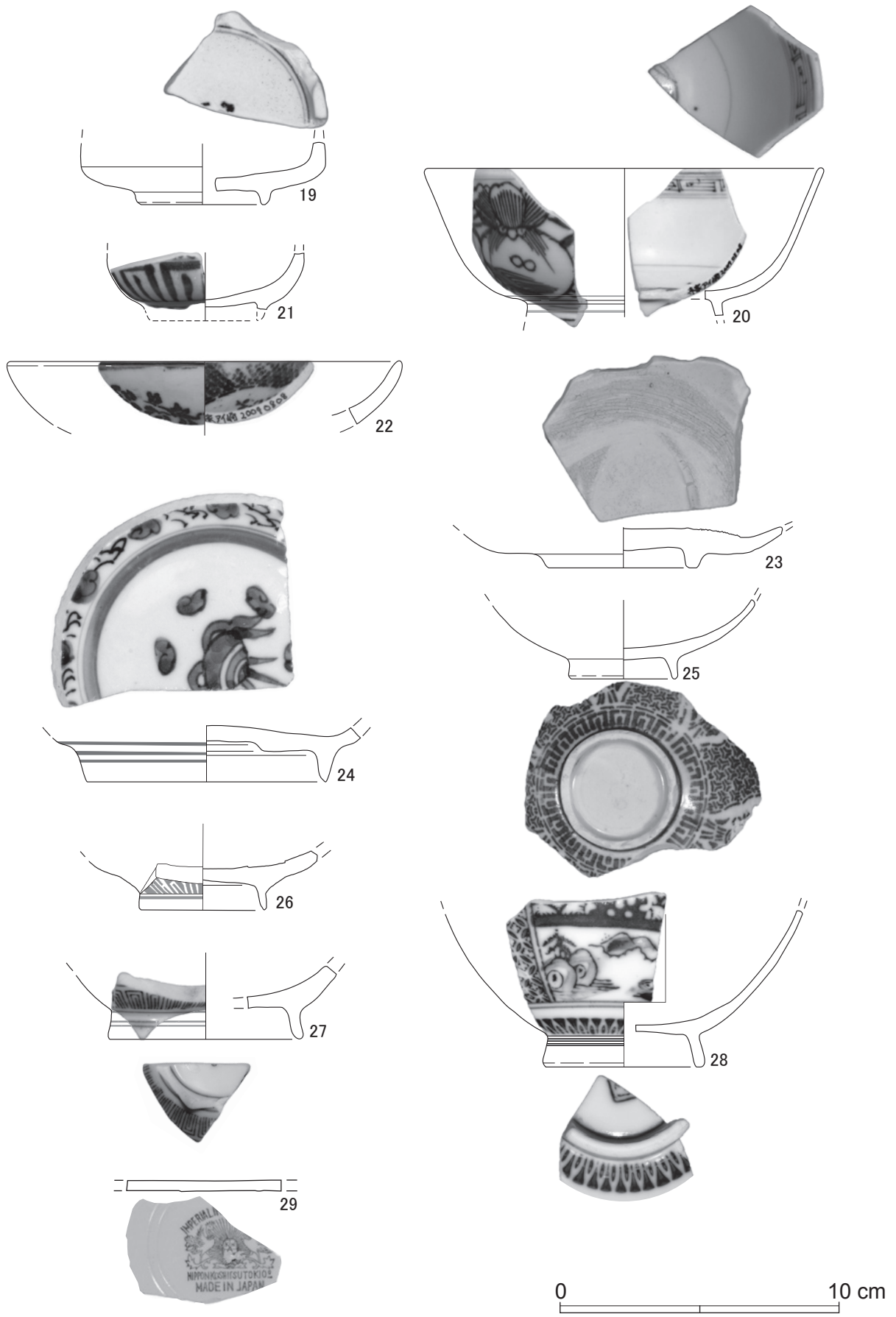


图 1-6 珠洲市寺家逢崎海岸 表面採集品 <S=1/2>

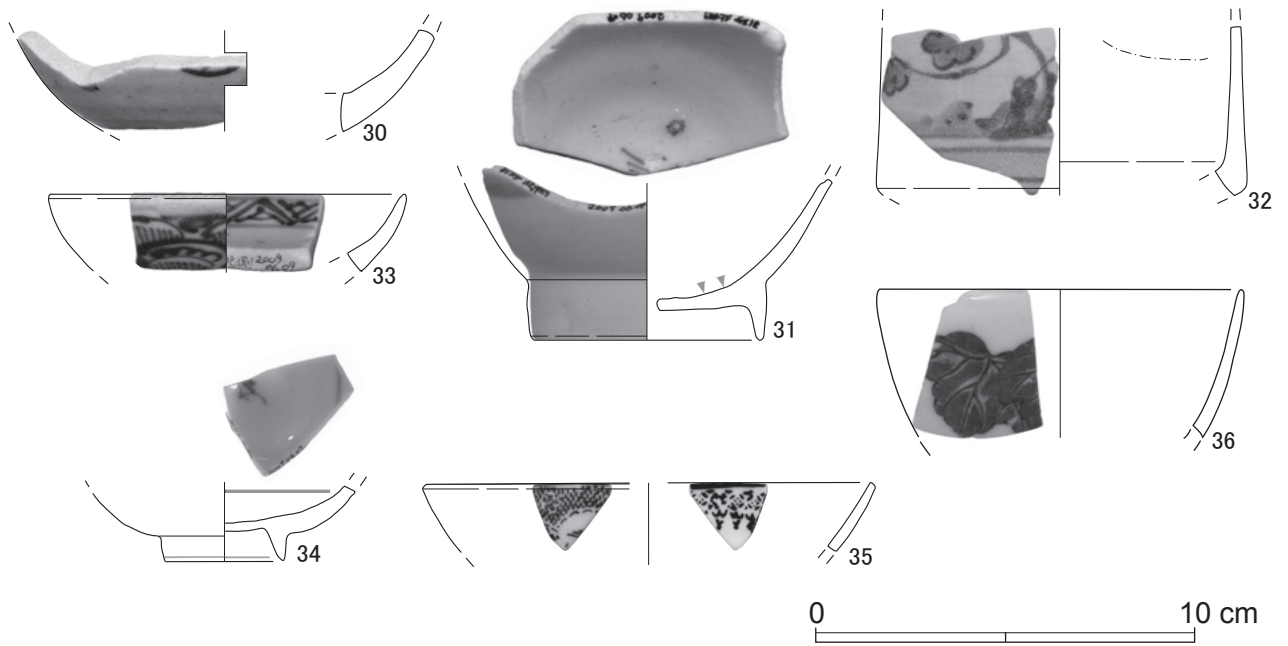


图 1-7 珠洲市引砂海岸（北）表面採集品 <S=1/2>

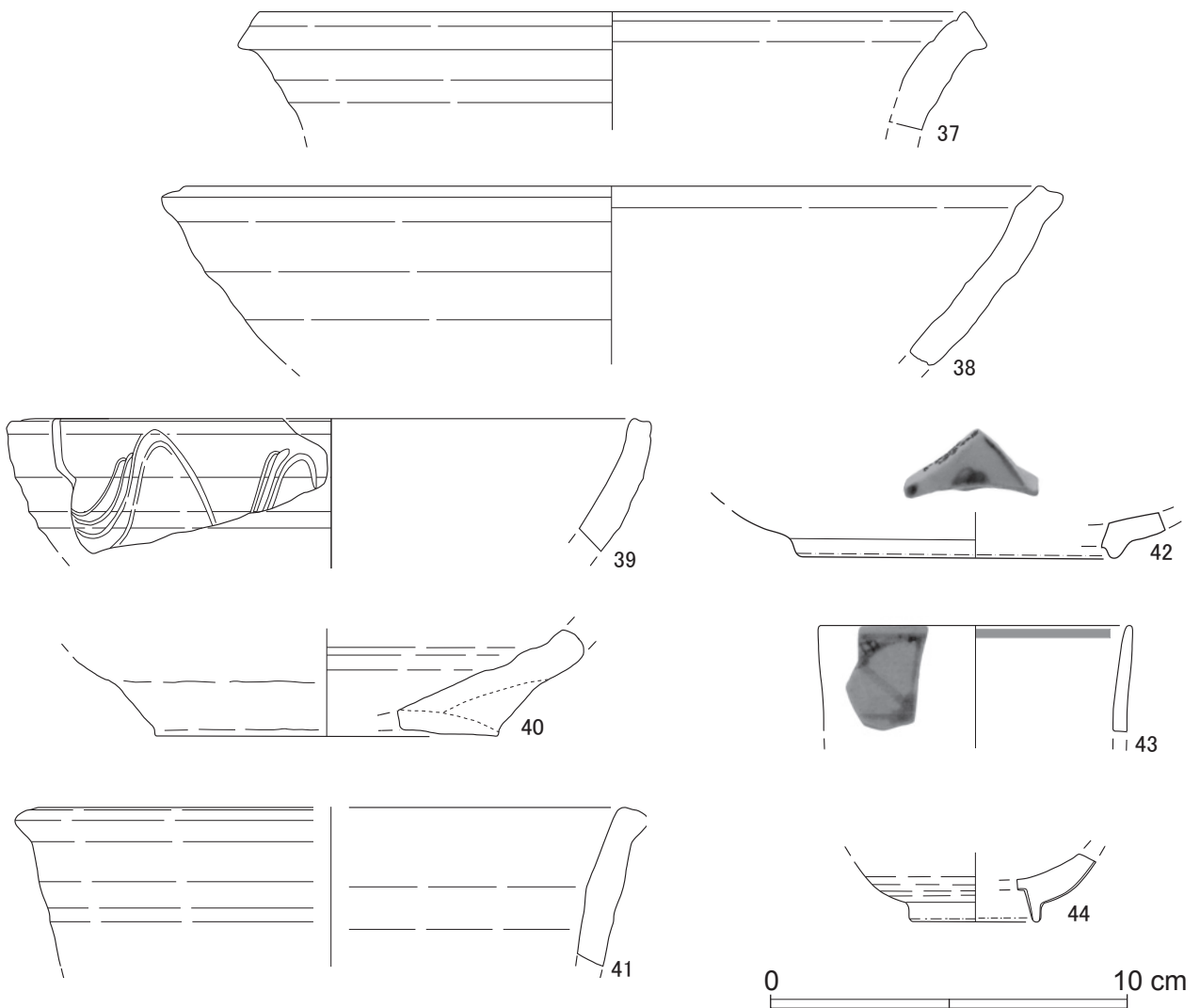


图 1-8 珠洲市引砂海岸（南）表面採集品 <S=1/2>

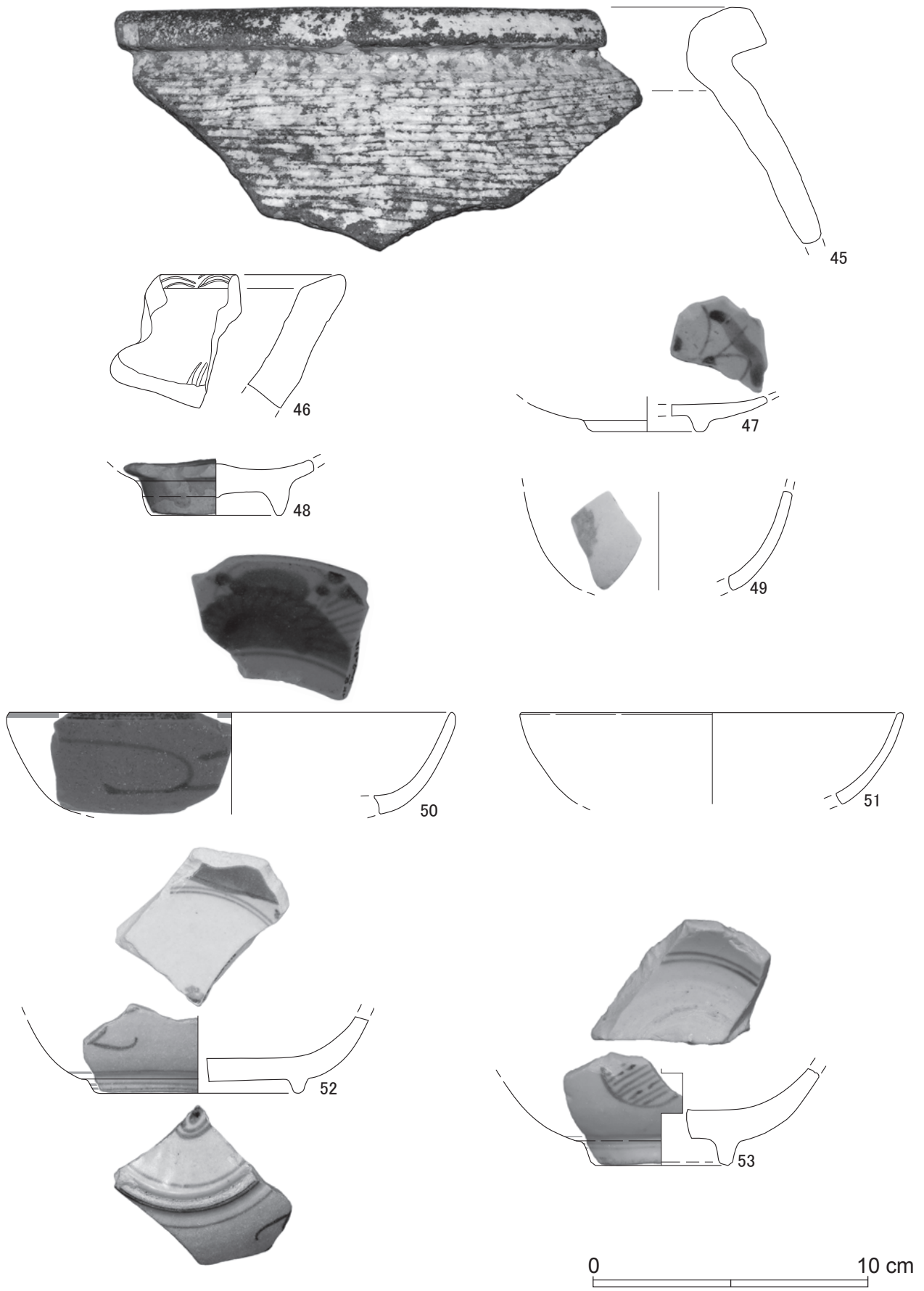


图 1-9 珠洲市伏見海岸 表面採集品 <S=1/2>(1)

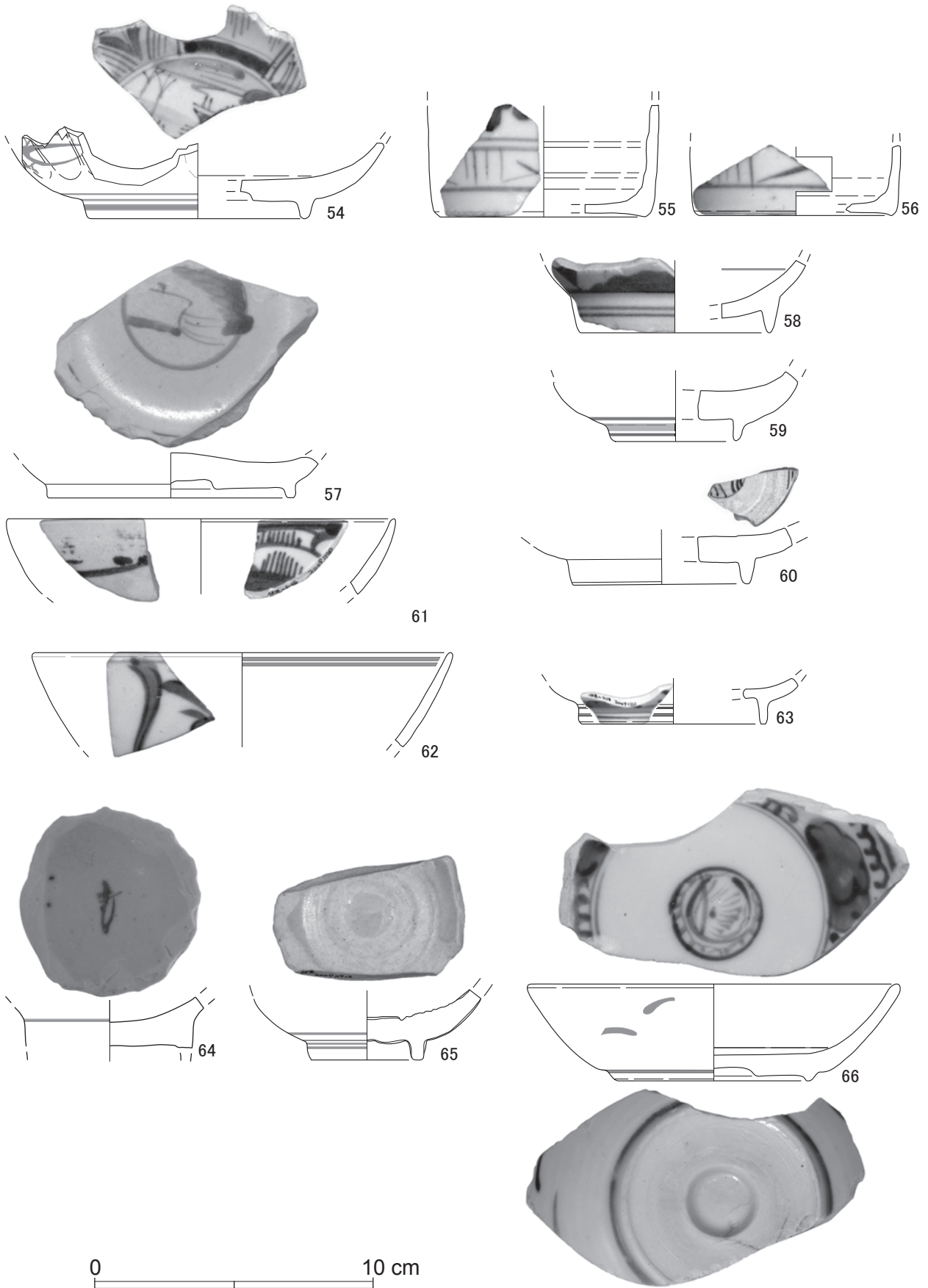


图 1-10 珠洲市伏見海岸 表面採集品 <S=1/2>(2)

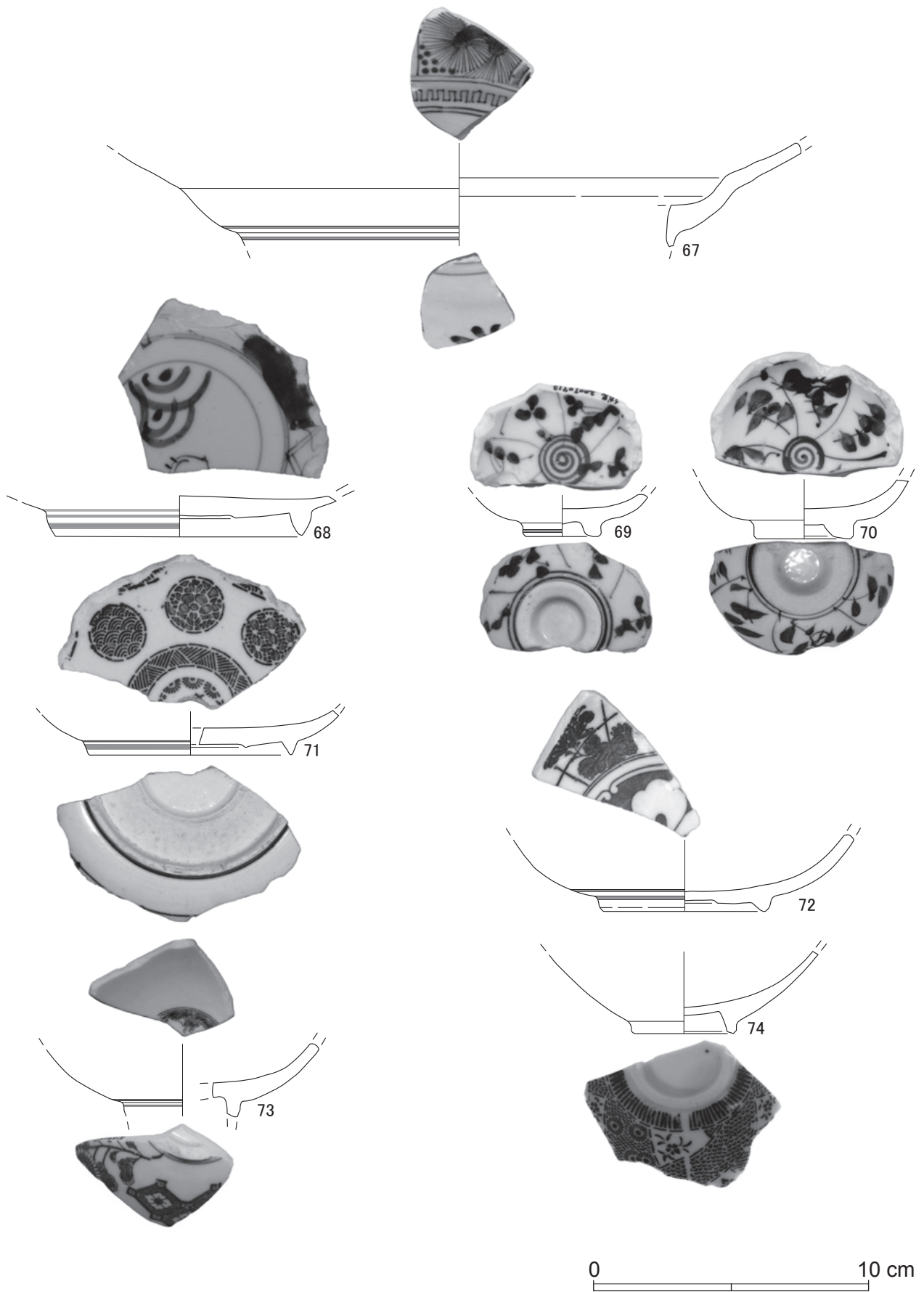


图 1-11 珠洲市伏見海岸 表面採集品 <S=1/2>(3)

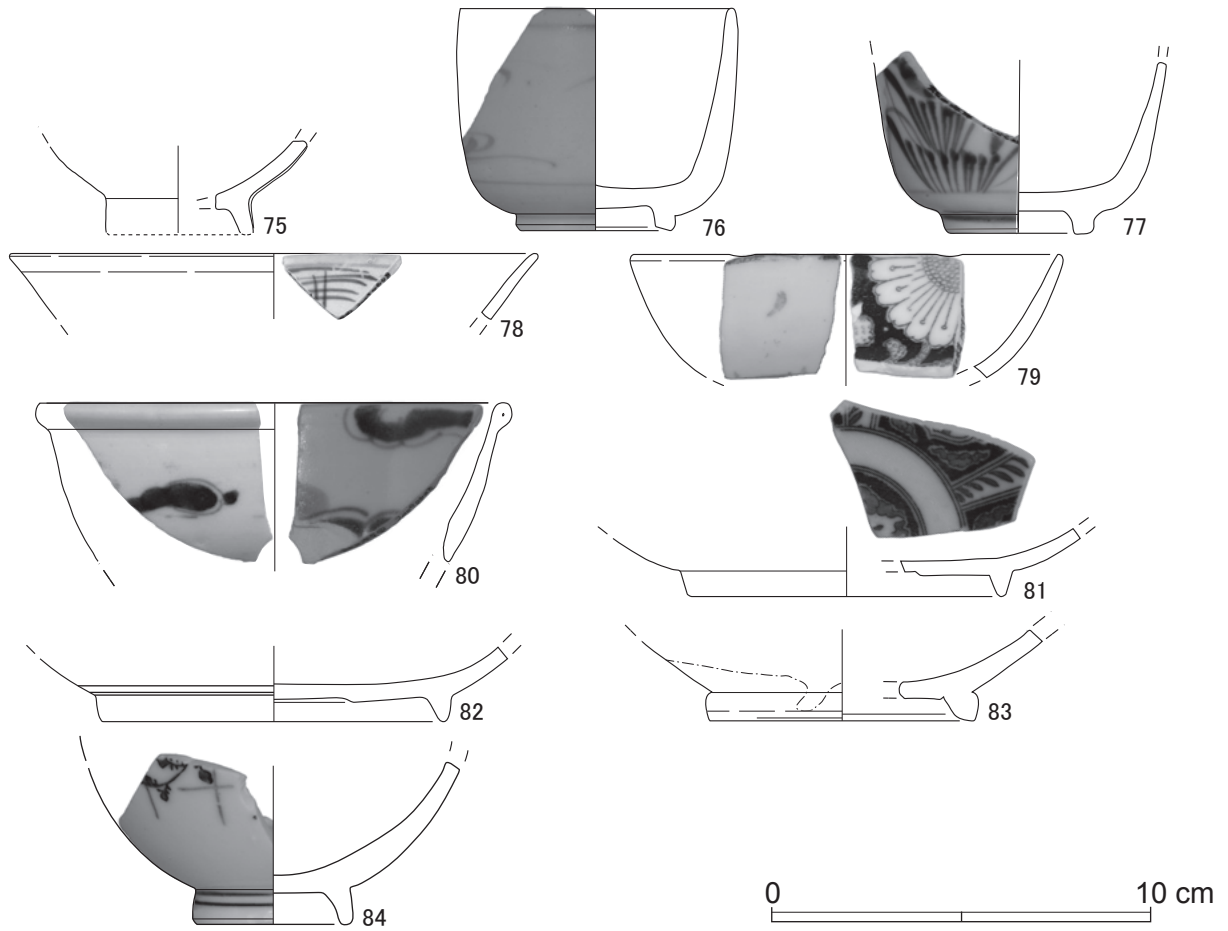
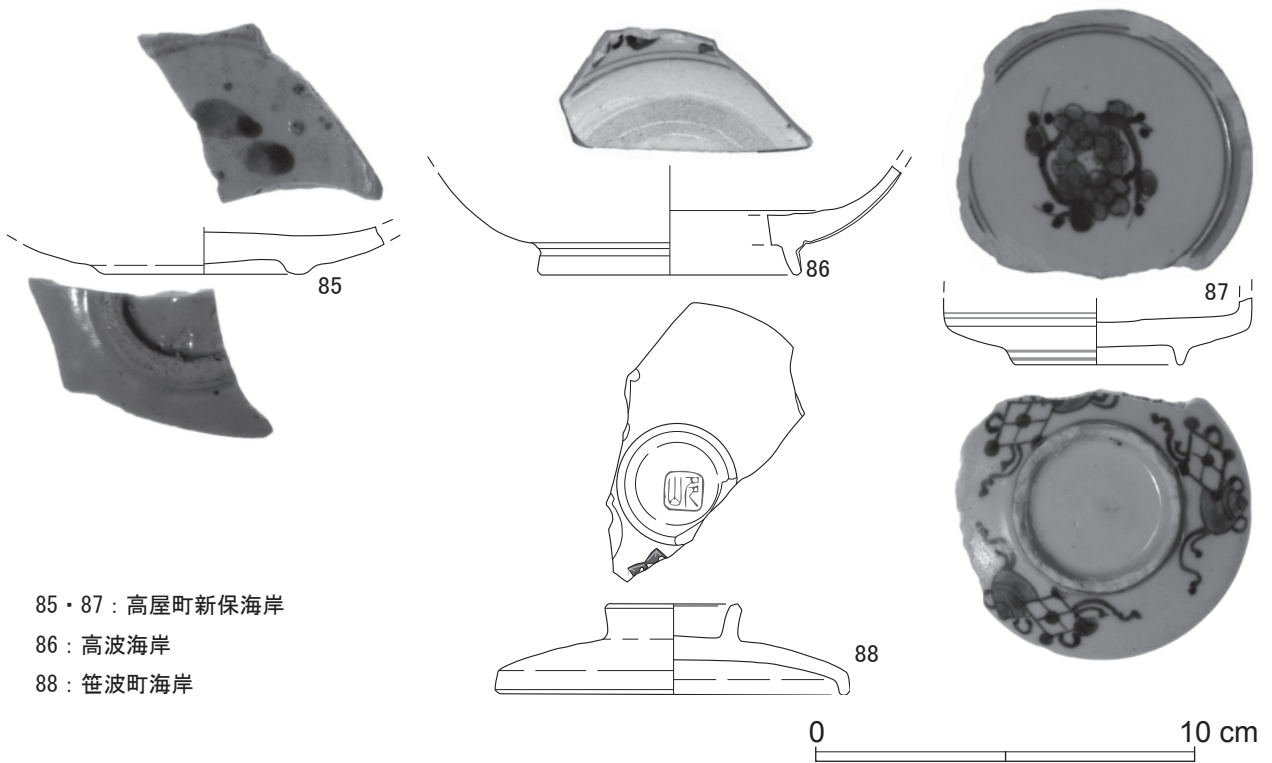


图 1-12 珠洲市飯田町海岸 表面採集品 <S=1/2>



85・87：高屋町新保海岸
 86：高波海岸
 88：笹波町海岸

图 1-13 珠洲市内採集資料 <S=1/2>

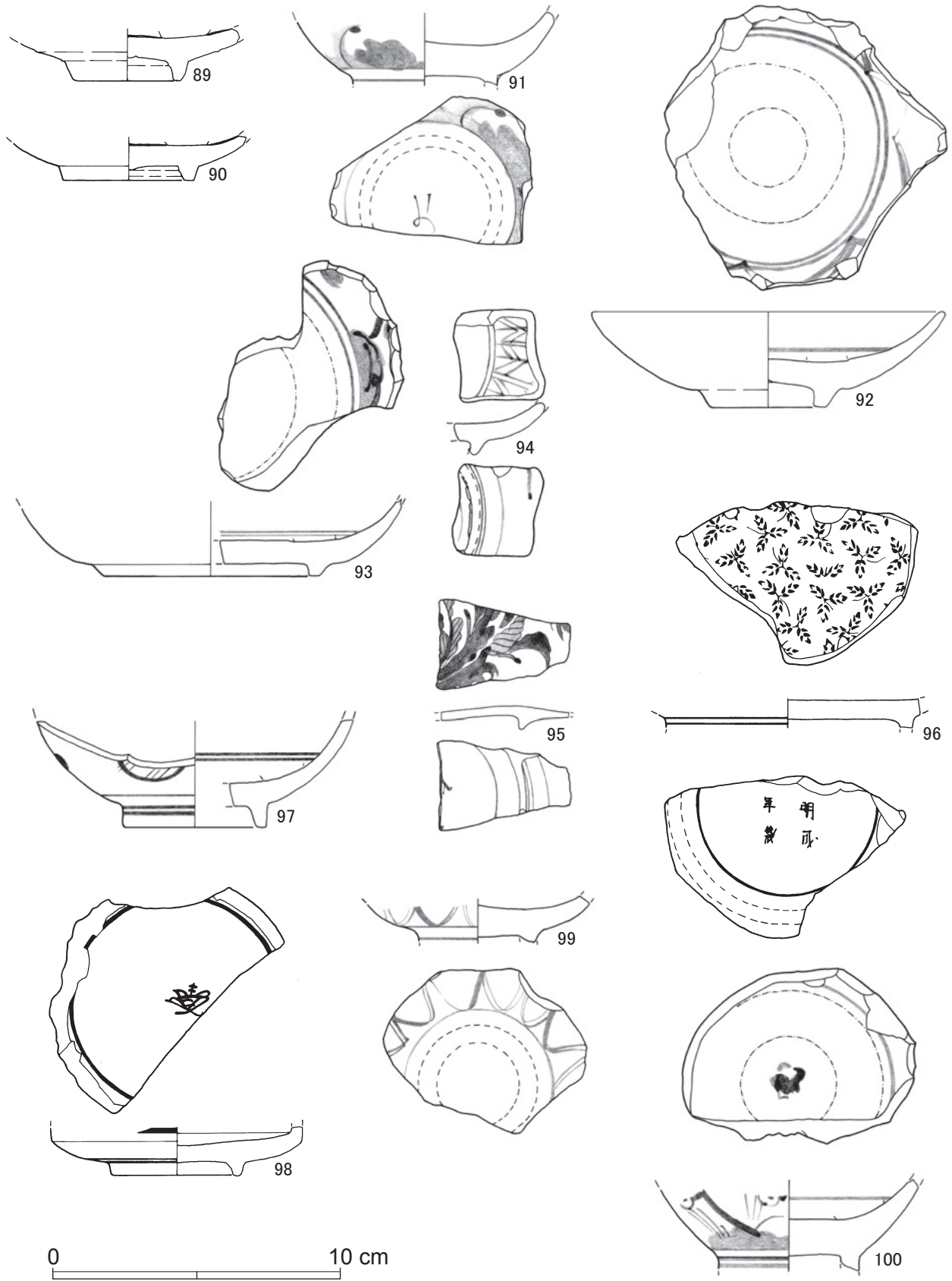


图 1-14 珠洲市飯田町海岸 枡谷氏表面採集品 <S=1/2>(1)

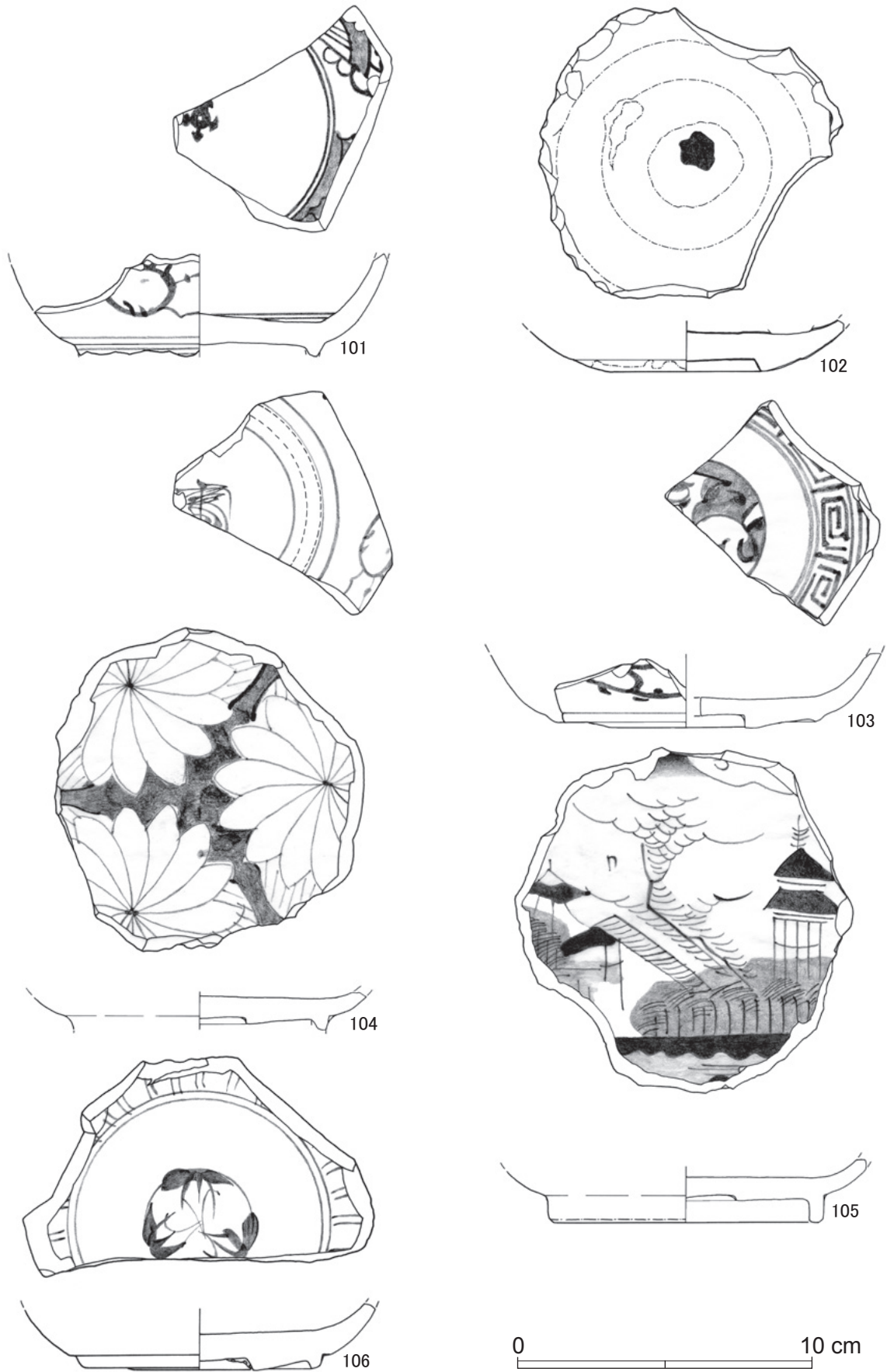


图 1-15 珠洲市飯田町海岸 枡谷氏表面採集品 <S=1/2>(2)

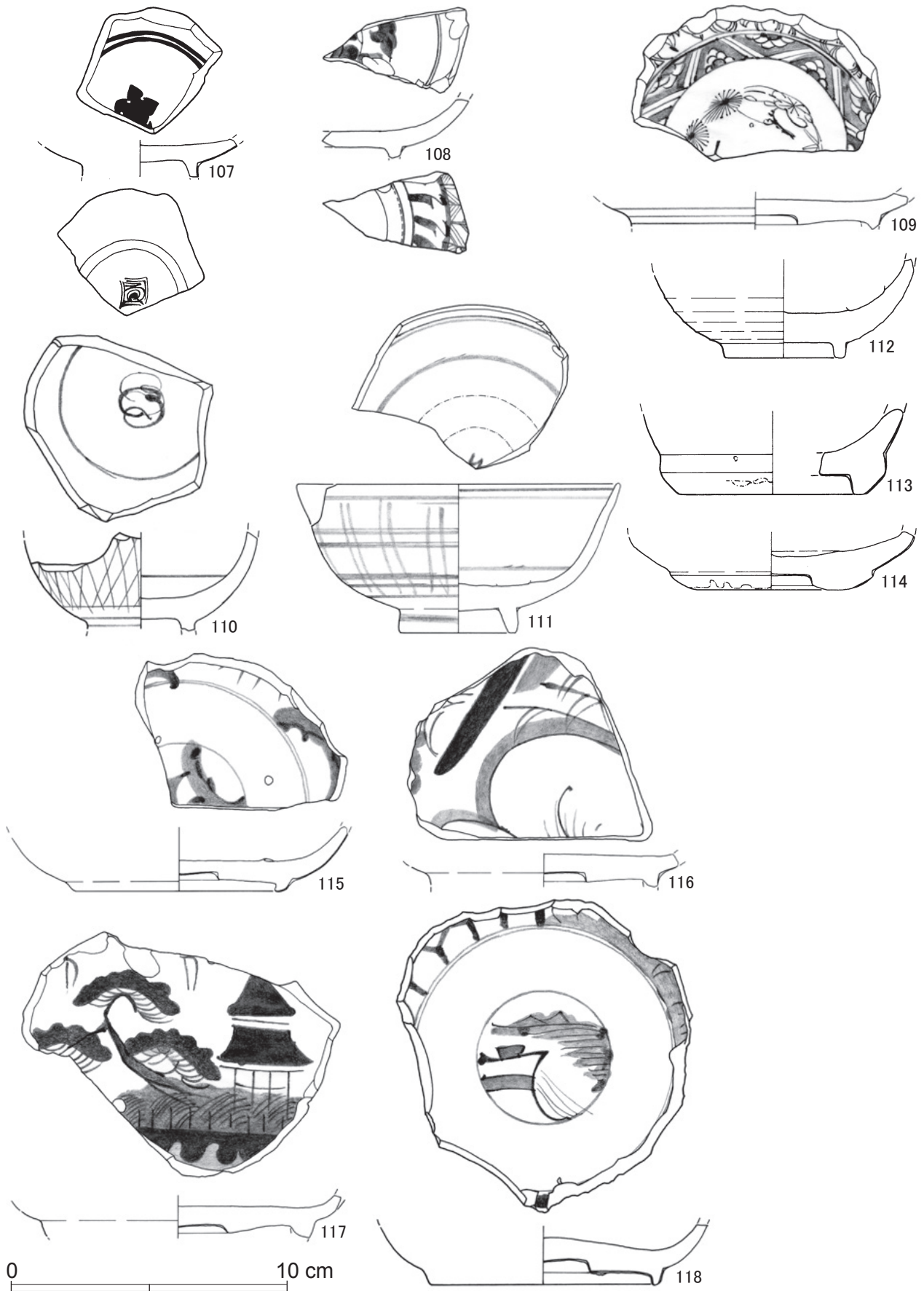


图 1-16 珠洲市飯田町海岸 枡谷氏表面採集品 <S=1/2>(3)

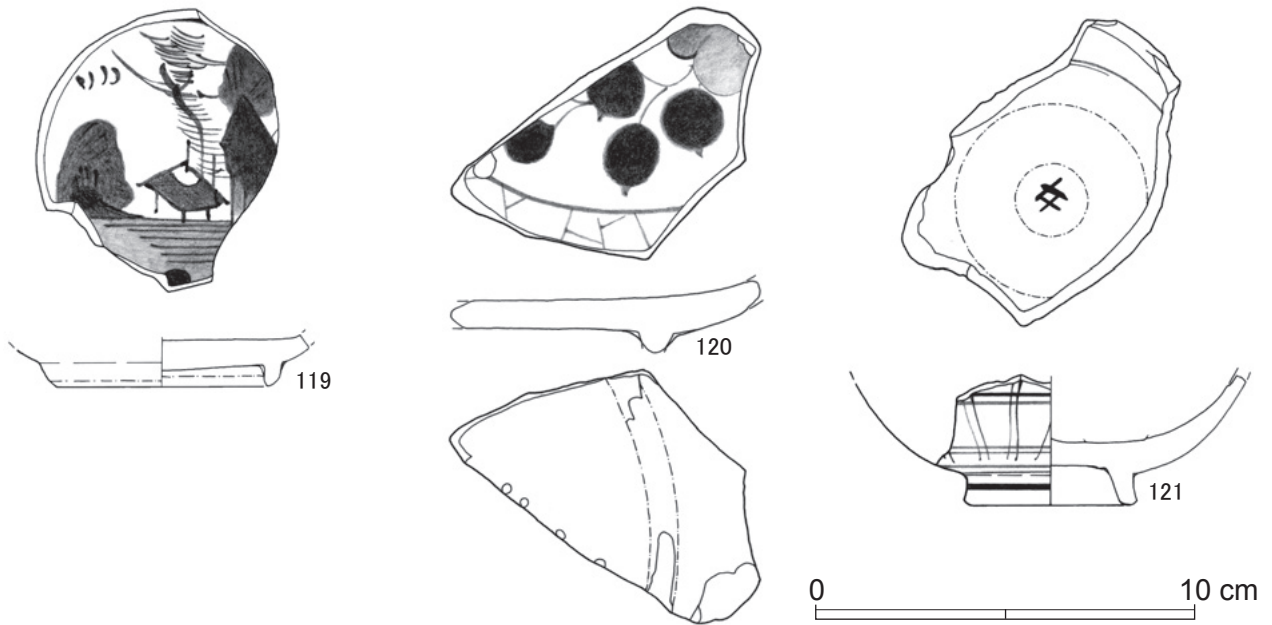


図 1-17 珠洲市飯田町海岸 枡谷氏表面採集品 <S=1/2> (4)



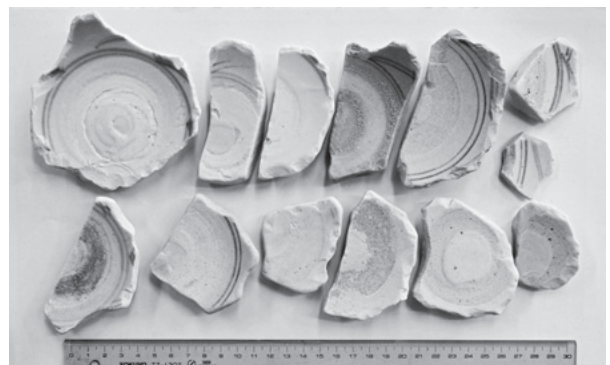
丸文丸碗 外面 (18 世紀後半)



丸文丸碗 内面



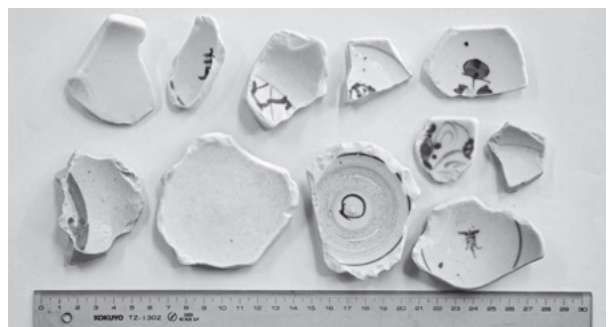
二重斜格子文皿 外面 (18 世紀前葉 - 中葉)



二重斜格子文皿 内面

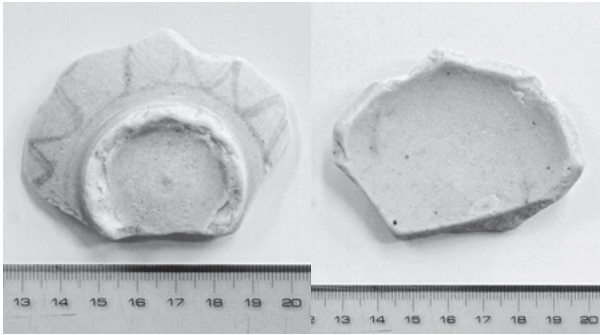


肥前系 染付 外面 (18-19 世紀)

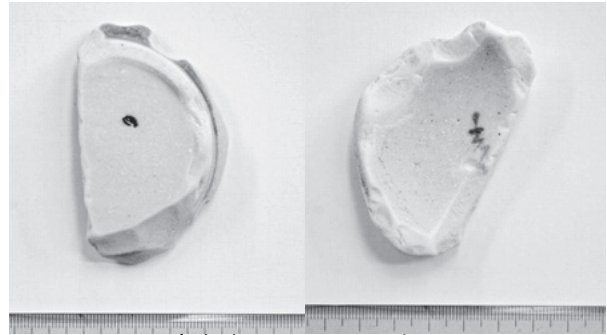


肥前系 染付 内面

写真 1-1 枡谷氏表採資料 (飯田海岸)



二重網目文丸碗 (18世紀)



広東碗 (1780-1830年)



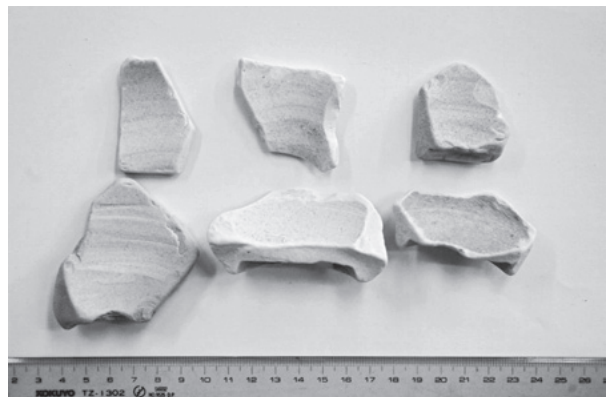
波佐見 染付皿 外面 (18世紀前葉-中葉)



波佐見 染付皿 内面



波佐見 德利/仏花瓶/袋物 外面 (19世紀)



波佐見 德利/仏花瓶/袋物 内面



肥前 染付皿 外面 (19世紀)



肥前 染付皿 内面

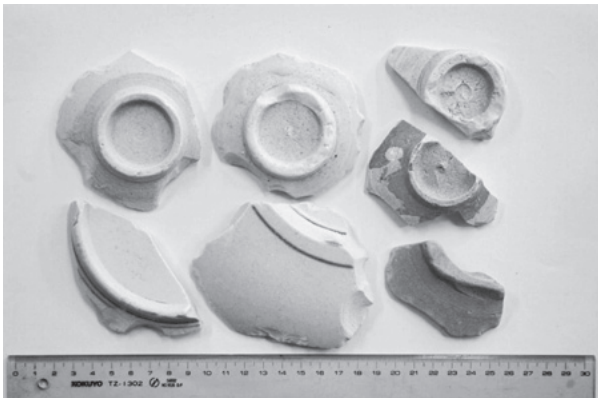
写真 1-2 枳谷氏表採資料 (飯田海岸)



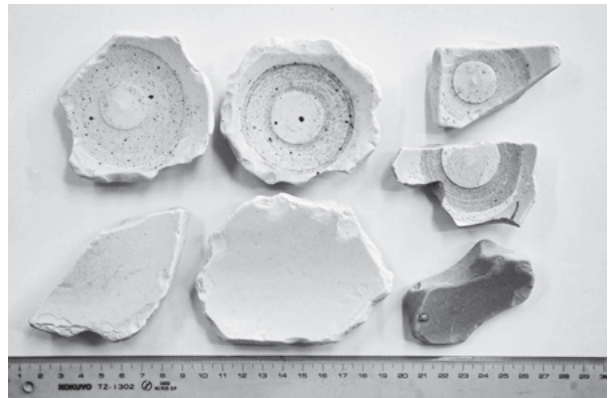
肥前系 染付 (18 世紀後半 -19 世紀前半)



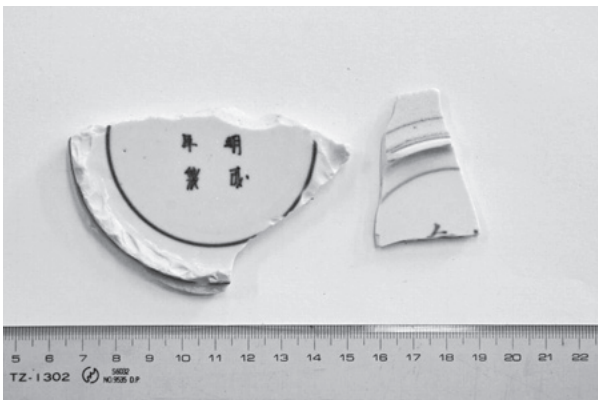
肥前系 染付 内面



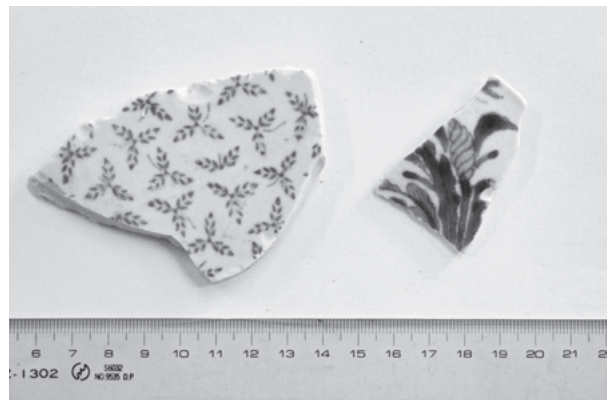
産地不明 (肥前系?) 外面 (18-19 世紀)



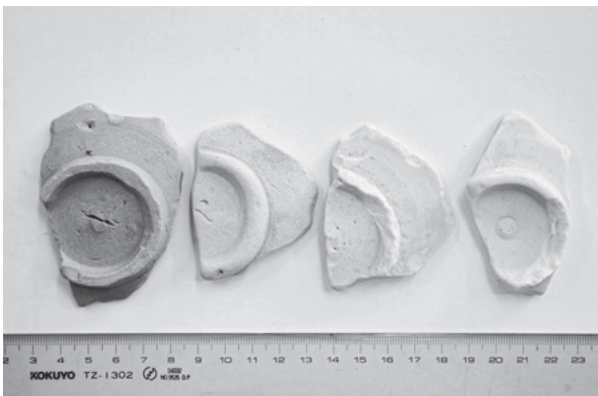
産地不明 (肥前系?) 内面



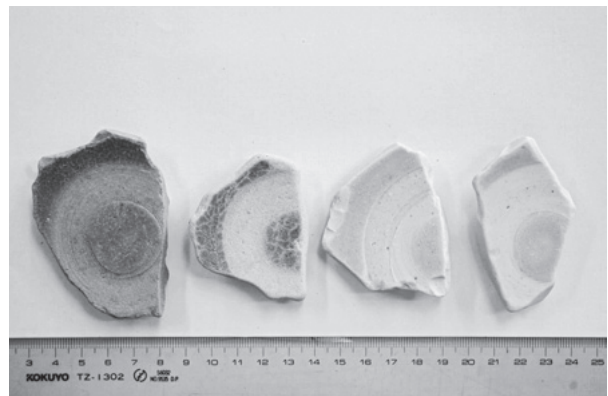
有田 染付皿 外面 (18 世紀前葉 - 中葉)



有田 染付皿 内面



肥前系 銅緑釉 / 青磁皿 外面



肥前系 銅緑釉 / 青磁皿 内面

写真 1-3 枅谷氏表採資料 (飯田海岸)



型紙刷染付皿 外面 (明治～)



型紙刷染付皿 内面



型紙刷染付 (明治～)



銅版染付大皿ほか (銅版と型紙の組み合わせ)



手描染付皿 (近代以降)



手描染付皿



ゴム版染付碗 (大正～)



珠洲焼

写真 1-4 枡谷氏表採資料(飯田海岸・引砂 - 高波海岸砂)

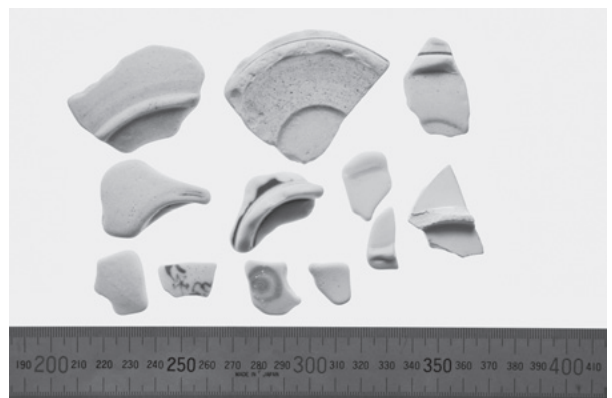
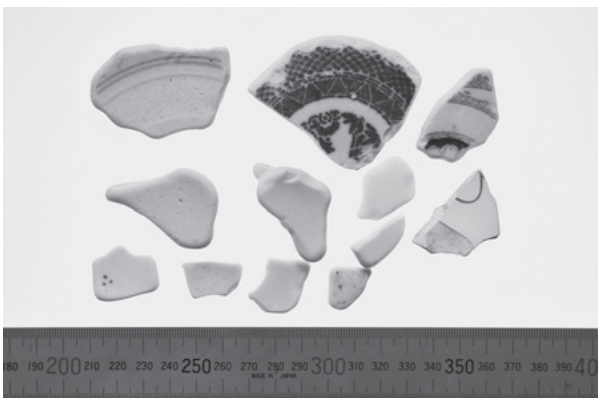
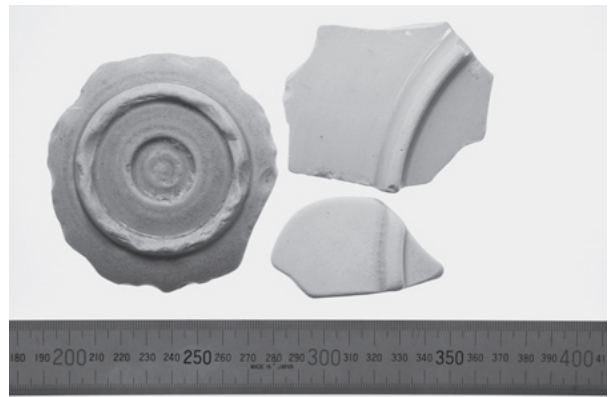
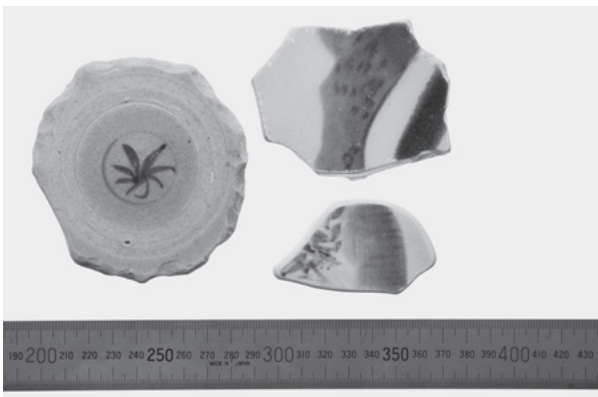
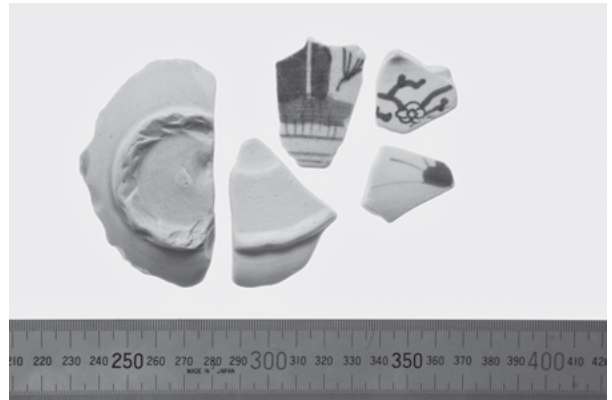
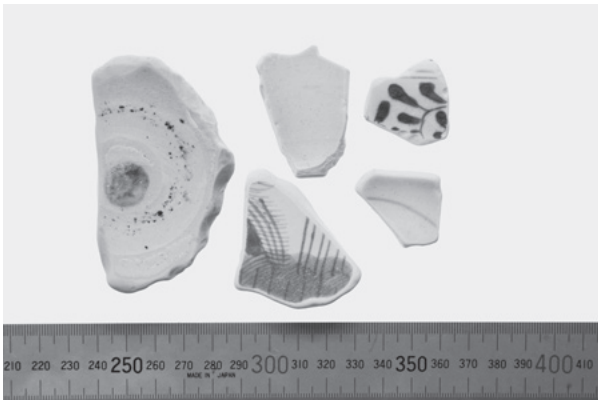
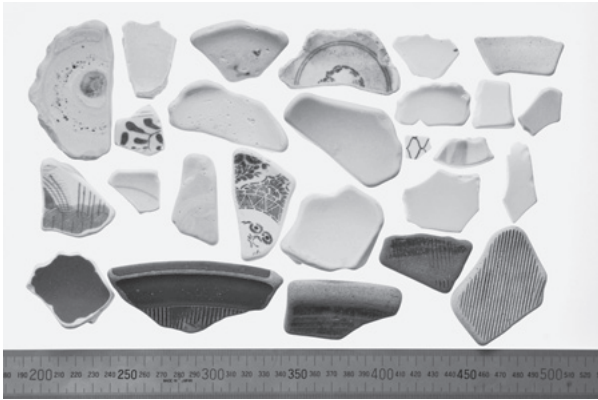
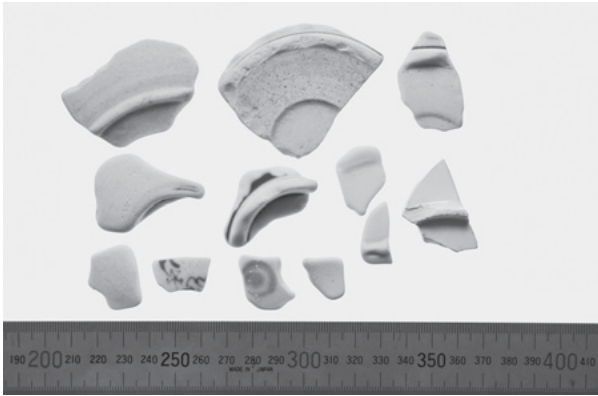
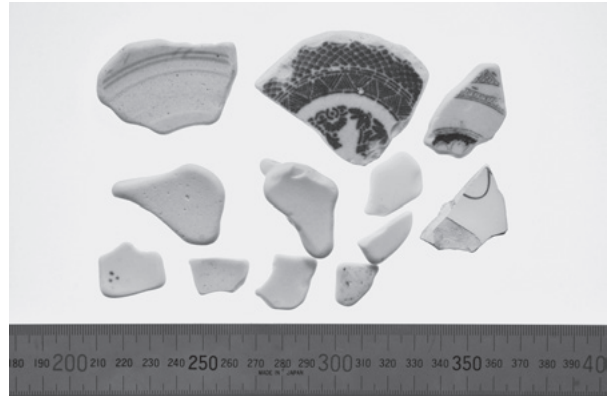


写真 1-5 表採資料（河浦海岸）



馬縹採集品 外面



馬縹採集品 内面



寺家遭崎採集品



飯田採集品



伏見採集品

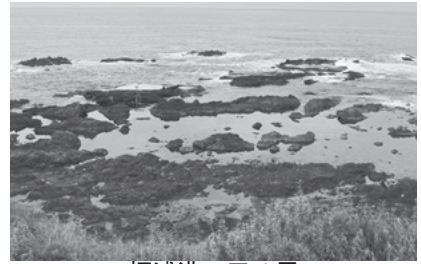
写真 1-6 表採資料 (馬縹・飯田・伏見)



福浦港 水の澗



福浦港 大澗



福浦港 田ノ尻



福浦港 極楽坂墓地



珠洲市 木の浦



珠洲市 折戸



珠洲市 川浦



珠洲市 高屋新保



珠洲市 馬縹



珠洲市 寺家遭崎



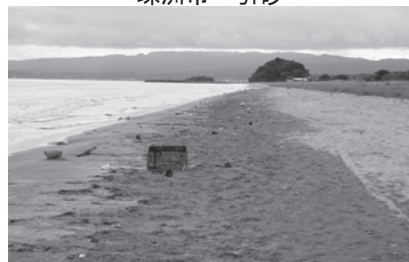
珠洲市 引砂



珠洲市 高波



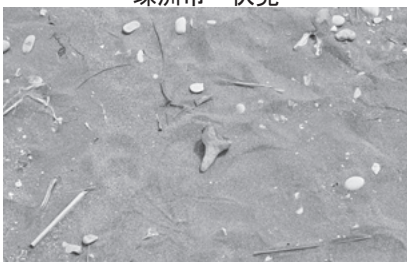
珠洲市 伏見



珠洲市 鉢ヶ崎



珠洲市 飯田（東側）



珠洲市飯田 製塩土器発見状況



珠洲市飯田（西側）



珠洲市 宝立町

写真 1-7 能登半島

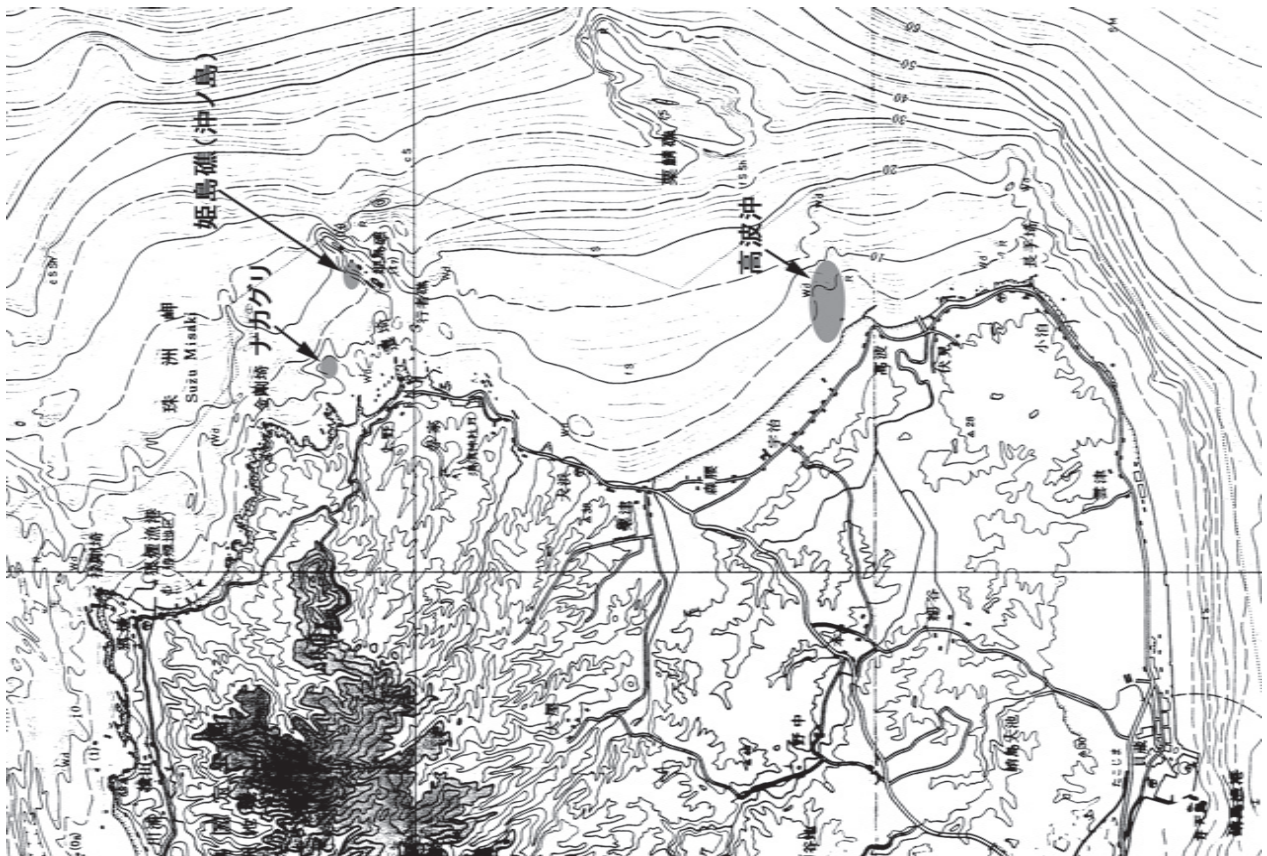
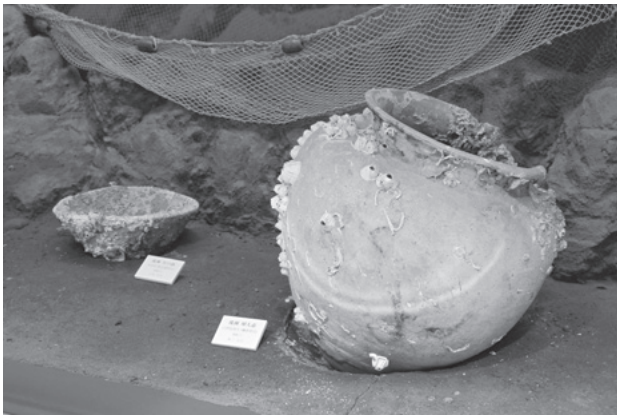


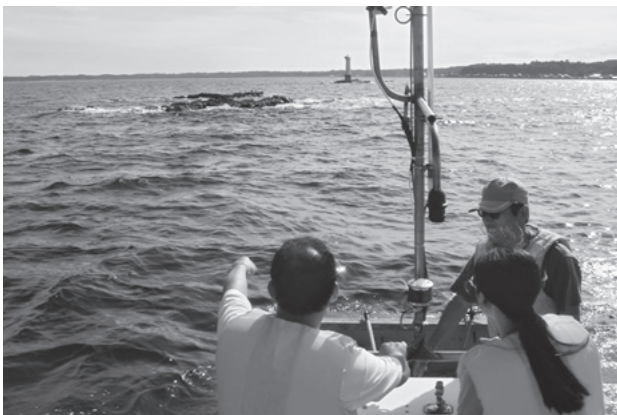
図 2-1 潜水調査海域位置図 (海上保安庁水路部「海底地形図」第 6334 号[○]1981 より転載、加筆)



1 珠洲焼資料館展示の海揚げりの珠洲焼



2 寺家沖引揚げの四爪鉄錨

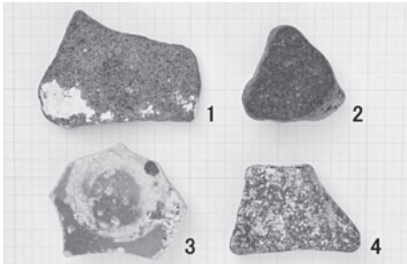


3 姫島礁近景

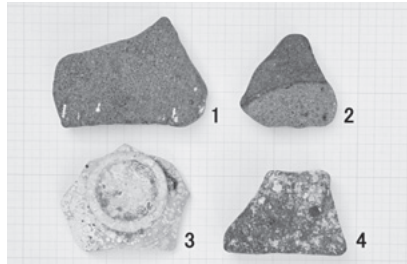


4 シュノーケリング調査地点

写真 2.



5 シュノーケリング調査採集陶磁器（内面）



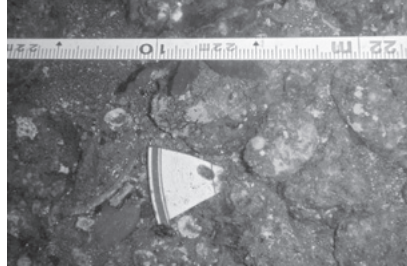
6 シュノーケリング調査採集陶磁器（外面）



7 寺家漁港にて潜水調査準備



8 沖ノ島付近の鉄鋼船確認状況



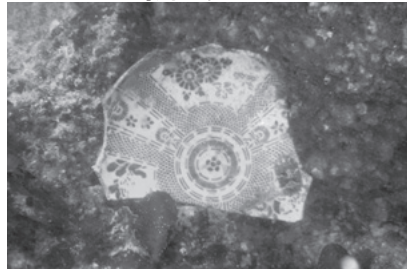
9 沖ノ島周辺検出の近代磁器



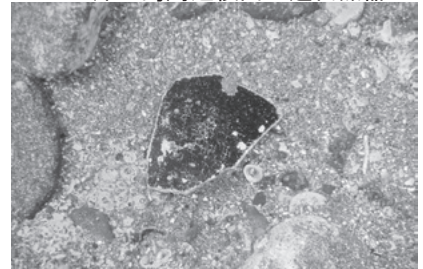
10 沖ノ島周辺検出の近代磁器



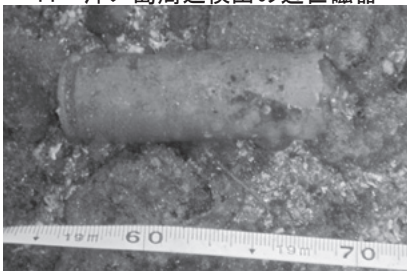
11 沖ノ島周辺検出の近代磁器



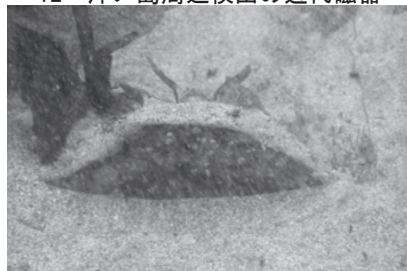
12 沖ノ島周辺検出の近代磁器



13 沖ノ島周辺検出の陶器



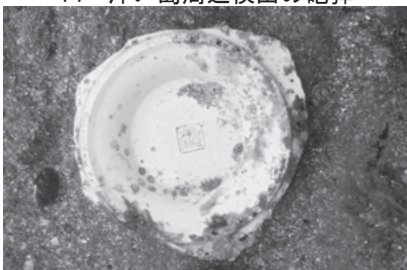
14 沖ノ島周辺検出の砲弾



15 高波沖検出の近代瓦



16 高波沖検出の近代磁器



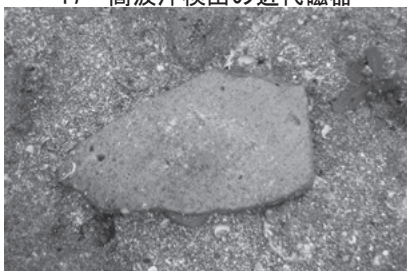
17 高波沖検出の近代磁器



18 高波沖検出の珠洲焼



19 高波沖検出の珠洲焼



20 高波沖検出の珠洲焼

写真 2. (つづき)

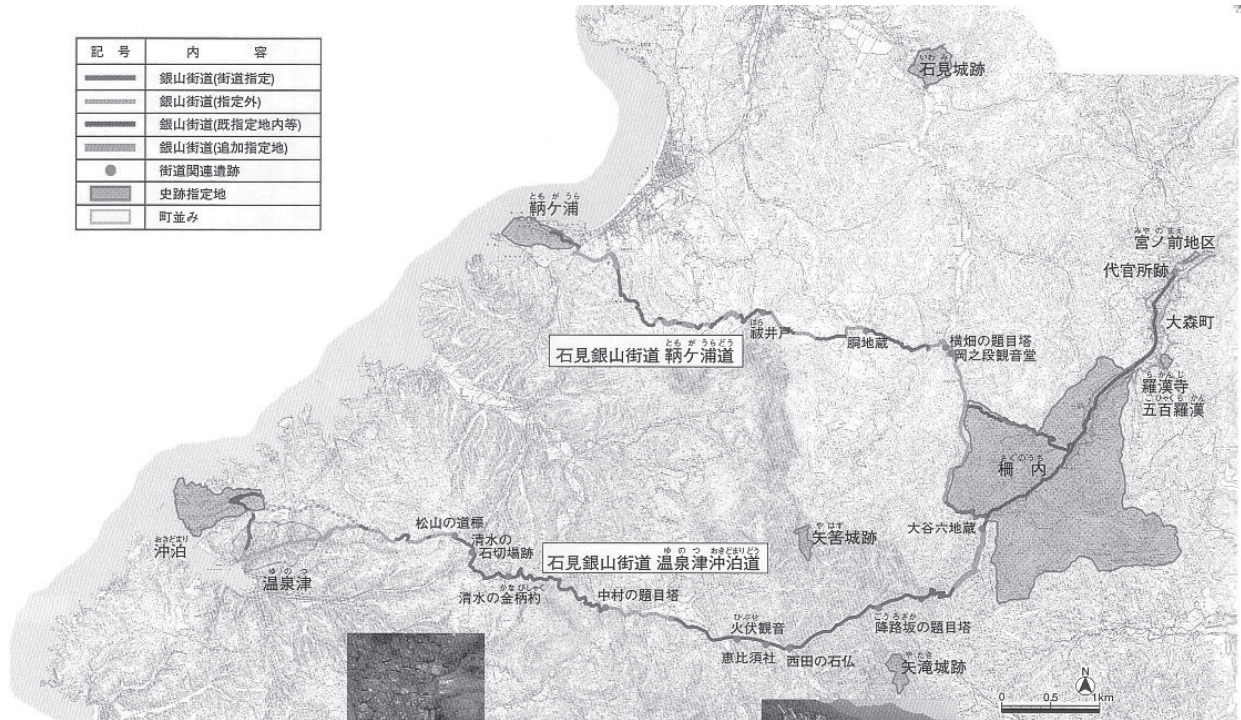


図 3-1 石見銀山遺跡の概要

(「石見銀山遺跡とその文化的景観」島根県教育庁文化財課世界遺産室 2008 より転載、加筆)

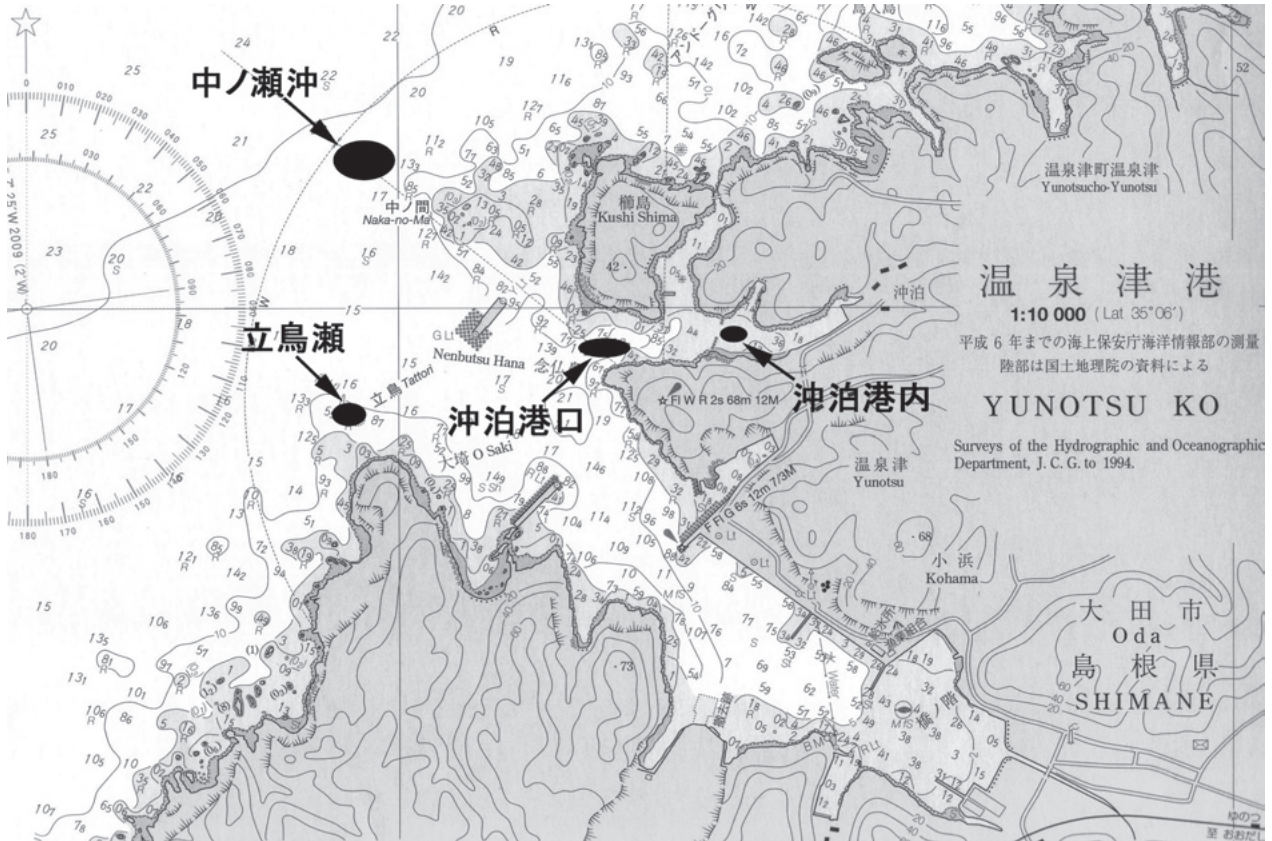
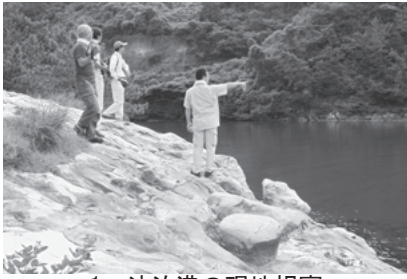


図 3-2 沖泊港潜水地点位置図

(島根県教委・大田市教委・温泉津町教委・仁摩町教委作成「石見銀山遺跡地図」より転載、加筆)



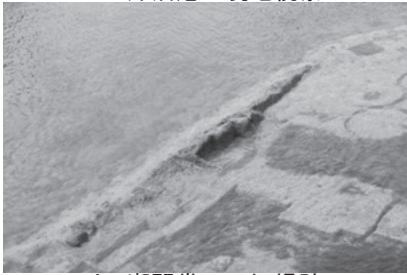
1 沖泊港の現地視察



2 沖泊港内海底引揚げ陶磁器の資料調査



3 現地視察の検討会



4 潮間帯の石切場跡



5 環状の「鼻ぐり岩」



6 ビット状の「鼻ぐり岩」



7 福浦港の石材切出し跡



8 福浦港の舳い用の加工岩



9 温泉津港口近景（北西から）



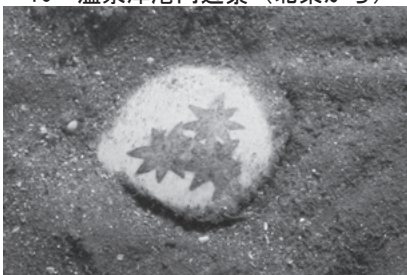
10 温泉津港内近景（北東から）



11 マジャーテフによる円形サーチ



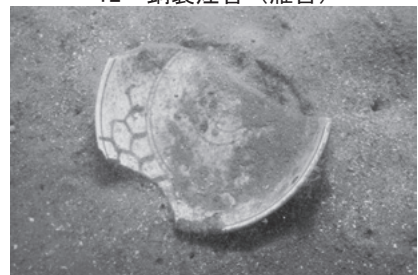
12 銅製煙管（雁首）



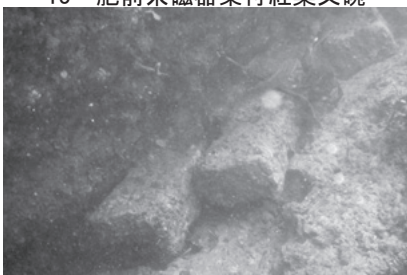
13 肥前系磁器染付紅葉文碗



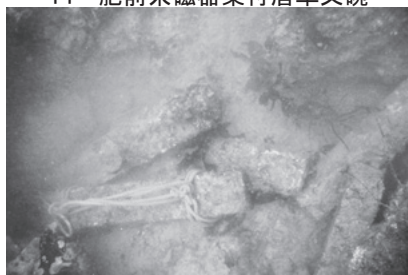
14 肥前系磁器染付唐草文碗



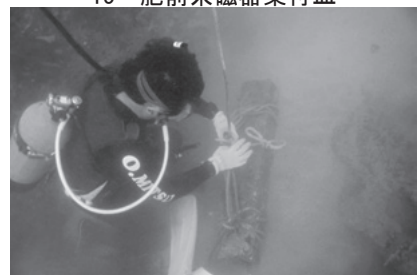
15 肥前系磁器染付皿



16 立鳥瀬検出の石材

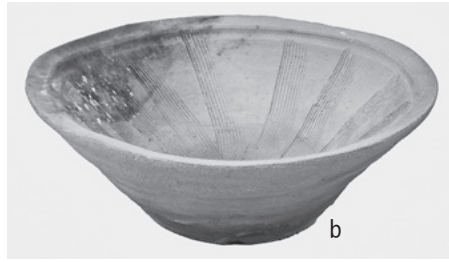


17 サンプル石材の検出状況



18 サンプル石材の回収準備

写真 3.



- a 玄達瀬出土弥生土器（福井県陶芸館所蔵）
- b 同 播鉢（福井県陶芸館所蔵）
- c 同 越前焼甕（福井県陶芸館所蔵）
- d キツジマ海底出土の弥生土器
（越前町史編纂委員会 1977 より転載）
- e 小浜市矢代地区海岸漂着の迦樓羅王立像
（福井県立美術館 2008 より転載）

写真 4-1 福井県海揚がり遺物



江良



阿曾



北前船歴史資料館



特務艦「関東」の船体部品
（河野歴史資料館所蔵）



厨



越前岬



居倉町



三国港（河口部分）

写真 4-2. 越前海岸（福井県）

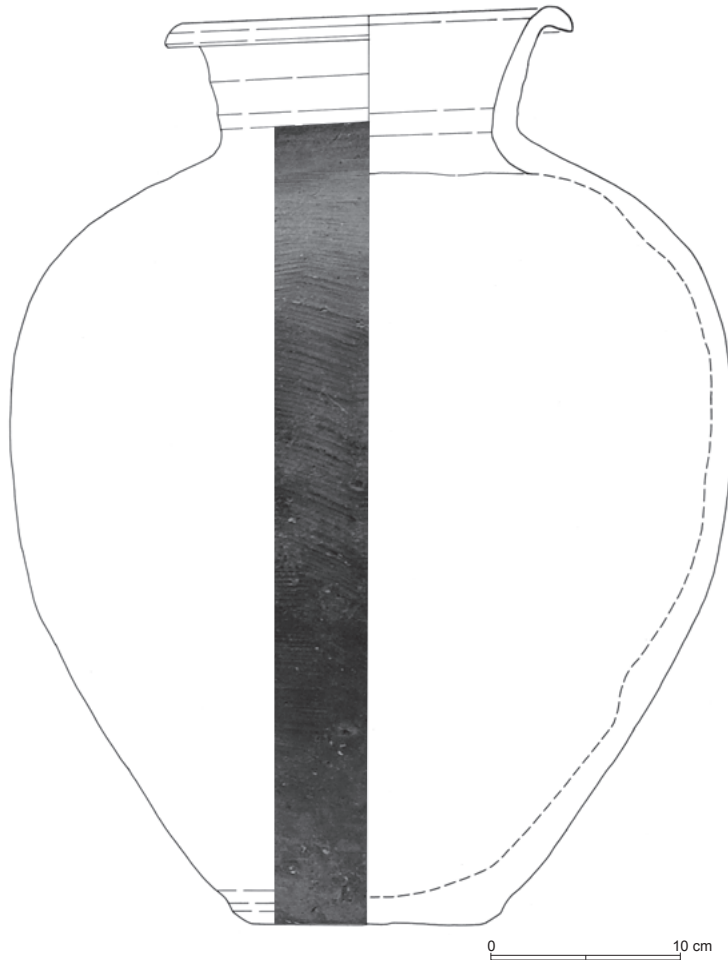


図 5-1 新潟県佐渡沖海底より引き揚げられた須恵器壺
(新潟市横井の丘ふるさと資料館所蔵)



写真 5-1 珠洲焼片口鉢
(寺泊民俗資料館所蔵)



写真 5-2 「順動丸」の外輪シャフト
(寺泊民俗資料館所蔵)

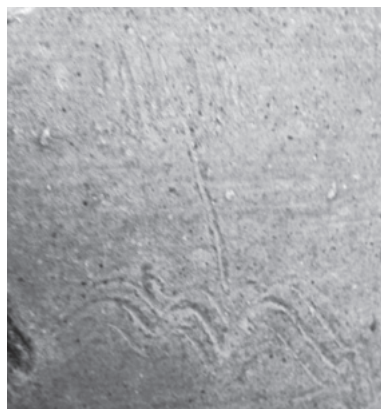


写真 5-3a 小林秋夫所蔵 鳥ヶ首岬沖出土の秋草文珠洲焼水注
b 同 体部文様
c 同 把手部分文様